

東日本大震災復興関連 埋蔵文化財調査報告書IV

－貞山堀・高大瀬遺跡隣接地－

2016 年 3 月

岩沼市教育委員会

東日本大震災復興関連 埋蔵文化財調査報告書IV

—貞山堀・高大瀬遺跡隣接地—

目 次

例言

第Ⅰ章 東日本大震災における岩沼市の被害状況 · · · · · 1

第Ⅱ章 遺跡の概観

- | | |
|--------------------------|---|
| 1. 位置と地理的環境 · · · · · | 2 |
| 2. 周辺の遺跡と歴史的環境 · · · · · | 3 |

第Ⅲ章 貞山堀の調査

- | | |
|-----------------------------|----|
| 1. 岩沼市域の貞山堀の被害状況 · · · · · | 10 |
| 2. 岩沼市域における貞山堀の沿革 · · · · · | 10 |
| 3. 調査に至る経緯と経過 · · · · · | 13 |
| 4. 各地点の調査成果 · · · · · | 14 |
| 5. まとめ · · · · · | 19 |

第Ⅳ章 高大瀬遺跡隣接地（西原地区）の調査

- | | |
|---------------------------|----|
| 1. 遺跡の位置と環境 · · · · · | 20 |
| 2. 調査に至る経緯と調査方法 · · · · · | 20 |
| 3. 成果概要 · · · · · | 20 |
| 4. まとめ · · · · · | 39 |

報告書抄録

例　　言

1. 本書は宮城県岩沼市下野郷字大瀬、藤曾根、早股字新長者森に所在する「貞山堀」、および下野郷字西原に所在する「高大瀬遺跡」隣接地で実施した確認調査・試掘調査の報告書である。
2. 貞山堀の調査は東日本大震災で被災した排水機場の災害復旧事業、高大瀬遺跡隣接地の調査は東日本大震災の復興事業である防災集団移転跡地活用事業に伴う事前の記録調査として実施されたものである。
3. 貞山堀の調査は、藤曾根排水機場地点を平成25年(2013)3月4日から3月26日、相の釜排水機場地点を平成25年(2013)4月9日、三軒茶屋排水機場地点を平成25年(2013)11月7日に実施した。また高大瀬遺跡隣接地の調査は、平成27年(2015)6月23日から7月2日にかけて実施した。なお、調査は岩沼市教育委員会生涯学習課が担当した。
4. 資料整理、および報告書作成については、平成27年(2015)12月1日から平成28年(2016)2月17日まで、岩沼市文化財整理室にて行なった。
5. 本書の遺構番号は、遺構の種別に関わらず、現地調査時に付したものを使用した。遺構記号は以下のとおりである。

SD ; 溝跡 SK ; 土坑 P ; 小柱穴

6. 本書の執筆・編集は、生涯学習課での協議の上、川又隆央、川島秀義が担当した。執筆分担については下記のとおりである。

川又 第Ⅰ章、第Ⅲ章　　川島 第Ⅱ章、第Ⅳ章

7. 発掘調査、および資料整理に際し、次の諸氏・諸機関より御協力・御教示を賜った。記して感謝申し上げます(五十音順・敬称略)。

千葉 宗久(岩沼市文化財保護委員会)　　宮城県教育庁文化財保護課

東北農政局仙台東土地改良建設事務所名取川土地改良建設事業事務所

西松建設　飛島建設　森本組

8. 本報告書における遺構・遺物挿図等の指示は次の通りである。

- (1) 遺構実測図の水糸高は海拔を示す。
- (2) 縮尺は図に示すとおりである。
- (3) 遺物観察表の法量における単位は「cm」である。
- (4) 土層、および土器の色調は「新版標準土色帖」(小川・竹原:1973)に掲った。

9. 高大瀬遺跡隣接地の調査では、測量原点として平面直角座標である岩沼市公共基準点を用いているが、東日本大震災後の使用であるために将来的には若干の齟齬が生じる可能性がある。

【平成27年度調査体制】

教育長　百井 崇　　教育次長　高橋 進　　生涯学習課長　菅井 英夫　　課長補佐　桂島 和浩
文化財係 係長　川又 隆央　技術主査　川島 秀義(神奈川県派遣)　文化財専門員　伊藤 和雄
【調査参加者(五十音順)】

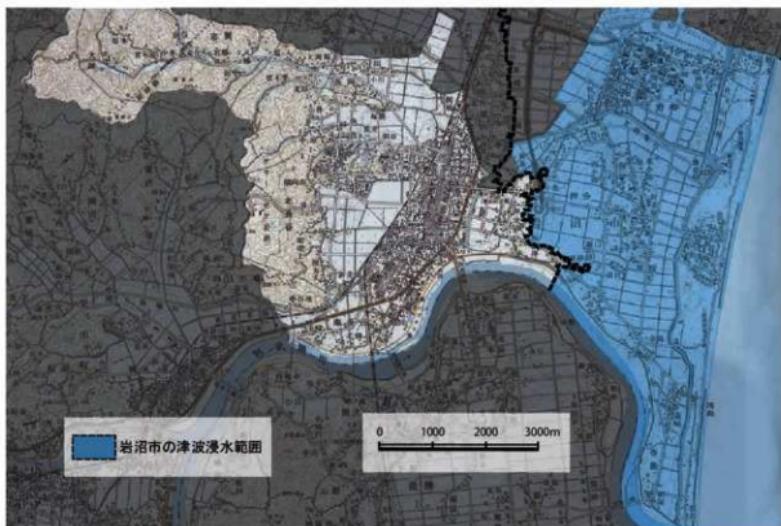
塩谷 信幸　　加藤 史誠　　齊藤 新彌　　渡辺 幹雄

第1章 東日本大震災における岩沼市の被害状況

平成 23 年(2011)3 月 11 日午後 2 時 46 分に発生した「東北地方太平洋沖地震」と名付けられた巨大地震では、岩沼市においても最大震度 6 弱を計測した。さらに余震が続く中、大津波が午後 4 時前後に沿岸部へ達し、その後何度も押し寄せたことによって市域東部の玉浦地区では 180 名にのぼる尊い人命が失われた(ほか行方不明 1 名)。また多数の人家が流失あるいは浸水し、海岸に向かつて広がる農地 1,240ha が冠水した。この津波は仙台平野以南の地では海岸線の奥深くまで浸水域が広まったことが知られているが、岩沼市においては海岸線より平野部で最大約 4.3 km まで津波が達し、総浸水面積は 29 km²、実に市域の約 48% に相当するという甚大な被害となった。

また津波が及ばなかった市街地においても電気や上下水道などのライフラインは全て寸断され、市民生活に重大な支障をもたらしたが、建造物に与えた影響も大きく、津波による被害と合わせると全壊 736 棟、半壊 1,606 棟、一部損壊 3,086 棟にのぼり、震災当初の仮設住宅への入戸は 384 戸となっている。特に岩沼市は江戸時代に奥州街道(奥州道中)の宿場町として栄えており、震災以前は商家の土蔵などが点在するなどその名残をとどめていたが、今回の震災によってその大部分が姿を消すことになってしまった。

岩沼市では震災発生以降、被災者支援に当たるとともに復興に向けての準備を進め、平成 24 年(2012)9 月に復興計画であるマスタープランを策定した。また平成 26 年(2014)には他に先駆けて市域東部の玉浦西地区で防災集団移転事業に伴う宅地造成工事が終了し、仮設住宅などからの移転が逐次進められている。



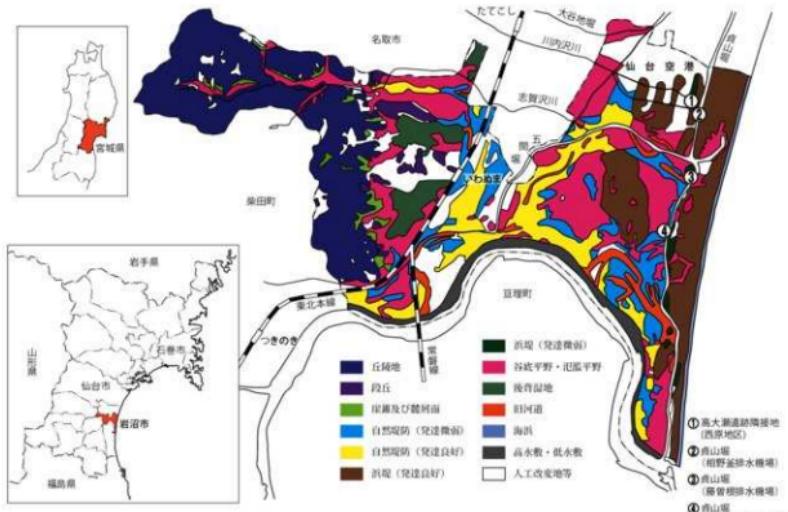
第1図 岩沼市の津波浸水範囲図

第Ⅱ章 遺跡の概観

1. 位置と地理的環境（第2図）

岩沼市は宮城県南東部に位置し、東は太平洋を臨み、北は名取市、南は阿武隈川を隔てて亘理町、西は奥羽山脈から派生した陸前丘陵に含まれる高館丘陵で村田町・柴田町と市域を接する。市域の南端を東流する阿武隈川は、福島県と栃木県の境に位置する旭岳に端を発し、福島県内を北流して宮城県へと至る大河川であり、その全長は国内6位の239km、流域面積は5,400 km²を測る。本市は、この阿武隈川が太平洋に注ぐ河口部北岸に位置している。また本市は古代では東山道と東海道連絡路が合する地点であるが、現在でも国道4号と同6号、JR東北本線と同常磐線の合流地点となつており、さらには空の玄関口として仙台空港が存在するなど、交通要衝の地として知られている。

市域を地質学的に大別すると、西側の山地と東側の広大な沖積地に分けられる。山地は南北に延びる岩沼西部丘陵（標高100～300m）と高館丘陵（標高200～300m）、これらの丘陵から東へ舌状に張り出す標高10～30mほどの長岡丘陵、二木・朝日丘陵と呼称している小規模な段丘面から成る。山地の東側に展開する広大な沖積地は仙台平野南部域に相当し、岩沼西部丘陵の東縁から太平洋までの間に7～8kmの幅をもって発達する。この沖積平野は阿武隈川をはじめとし、五間堀川・志賀沢川などの中小河川の堆積作用によって形成され、その沿岸には自然堤防が顕著に発達している。本報告対象遺跡は、仙台平野沿岸部海岸線に沿って発達する第Ⅲ浜堤列上および堤間湿地にかけて位置している。



第2図 岩沼市の位置と地形分類

(岩沼市 1992 を改変)

2. 周辺の遺跡と歴史的環境（第3図）

本報告対象遺跡周辺では、縄文時代から近世にかけて種々の遺跡が形成されている。以下にこれまでの発掘調査等によって得られた知見について、時代順にその概略を記す。

縄文時代

縄文時代の遺跡は、鶴ヶ崎城跡【3】が確認されている。平成16年(2004)に実施した第4地点の調査において、土里下より埋没小支谷で形成された遺物包含層を検出した。この遺物包含層から出土した土器は、無文で織維混入が顕著に認められない楓木貝塚下層出土資料に類するものから、織維混入が顕著で三角文の結節点に円形刺突文を配し内面に条痕文を有する鶴ヶ島台式、そして同様に織維混入が顕著で外面に縄文、内面に条痕文を有する梨木畠式に比定される土器群であり、総じて早期後葉に位置付けられる。出土した土器の器種は、全容が判明する資料は少ないながらも深鉢と鉢で占められる（岩沼市教育委員会2005b、岩沼市史編纂委員会2015）。

弥生時代

弥生時代の遺跡は、かめ塚西遺跡【2】と鶴ヶ崎城跡【3】が確認されている。かめ塚西遺跡では、弥生土器が表採されていることから、集落跡と考えられる（岩沼市史編纂委員会2015）。

鶴ヶ崎城跡では平成16年(2004)に実施した第4地点の調査において、弥生時代中期後葉と考えられる堅穴住居跡を検出し、十三塚式に比定される弥生土器、および石包丁等の石器が出土した（岩沼市教育委員会2005b）。

古墳時代

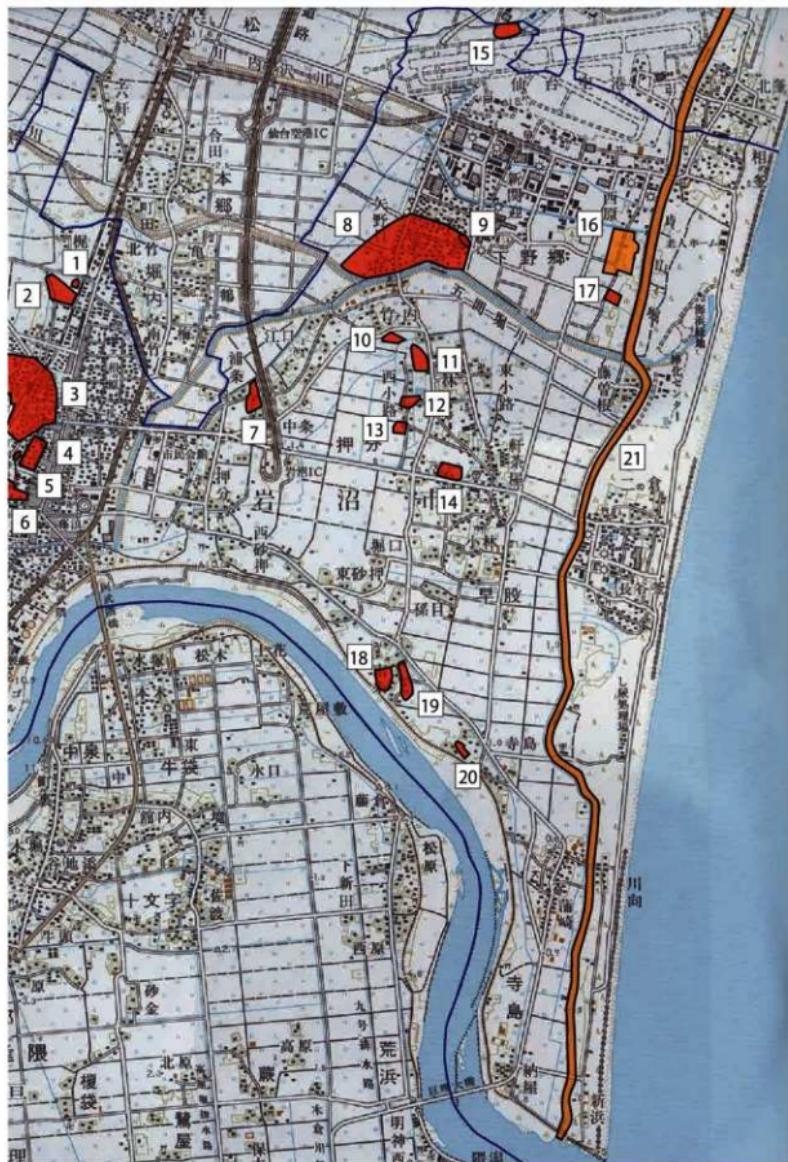
古墳時代の遺跡は、孫兵衛谷地遺跡【15】が確認されている。孫兵衛谷地遺跡では平成24年(2012)に実施した調査において、古墳時代前期の塙釜式に位置付けられる土師器を含む遺物包含層の存在が明らかとなった（岩沼市史編纂委員会2015）。

高塚古墳は、県指定史跡かめ塚古墳【1】において岩沼市史編纂事業に伴い平成24年(2012)に発掘調査を実施し、主軸長約48m、後円部径約25m、前方部長約22m、くびれ部幅約11mと推定される周溝を伴う前方後円墳であることが判明した。遺物は、周溝の底面から木製鋤、堆積土から土師器、須恵器が出土し、時期はこれまで古墳時代中期と考えられてきたが、古墳時代前期にさかのぼる可能性がある（岩沼市史編纂委員会2015）。

横穴墓は岩沼丘陵から東西に派生する低位丘陵斜面の凝灰岩層露頭面で多く造営され、丸山横穴墓群【5】では昭和34年(1959)に発掘調査が実施されている。丘陵の北西斜面には10基の横穴墓が並び、形態はほぼ共通しており、平面が方形で、立体面がドーム型である。須恵器、土師器、金属器、玉器、人骨等が出土し、時期は出土遺物から7世紀前半～8世紀初頭と考えられる（岩沼市史編纂委員会2015）。

古代

古代遺跡は、かめ塚西遺跡【2】、館外遺跡【9】、新田東遺跡【14】、高大瀬遺跡【16】、にら塚遺跡【17】、および西須賀原遺跡【18】が確認されている。現時点での発掘調査によって得られた知見は少ないと、かめ塚西遺跡では、土師器、須恵器が表採されていることから、集落跡と考えられる（岩沼市史編纂委員会2015）。



第3図 周辺遺跡地図

表1 岩沼市内遺跡一覧

団中番号	登録番号	遺跡名	所在地	種別	時代
1	15001	ちめ塚古墳	字亀塚	古墳	古墳
2	15002	ちめ塚西遺跡	字亀塚	遺物散布地	弥生・古代・近世
5	15003	丸山横穴墓群	二木二丁目	横穴墓	古墳
	15004	白山横穴墓群	十六崎四丁目ほか	横穴墓	古墳
	15005	新明塚古墳	長岡字塚原	古墳	古墳
	15006	杉の内遺跡	三色吉字杉の内ほか	集落跡	弥生・古墳・古代
	15007	北原遺跡	長岡字北原ほか	集落跡・貝塚	縄文・弥生・古墳・古代
	15008	二木横穴墓群	二木二丁目	横穴墓	古墳
	15009	山畠南貝塚	小川字山畠南ほか	集落跡・貝塚	縄文・古代
	15010	長谷寺横穴墓群	北長谷字山向山	横穴墓	古墳・古代
	15011	長塚古墳	長岡字台	古墳	古墳
15	15012	除兵衛谷地遺跡	下野路字小谷地	遺物散布地	古墳
	15013	大日遺跡	志賀字大日	集落跡	縄文
	15014	下塙ノ入遺跡	志賀字塙ノ入ほか	集落跡	縄文
	15015	鹿野遺跡	三色吉字鹿野ほか	集落跡	古墳・古代
	15016	平等山横穴墓群	三色吉字根松輪	横穴墓	古墳
	15017	新館跡	北長谷字根下	城郭跡	中世
	15018	煙堤上横穴墓群	北長谷字煙堤上	横穴墓	古墳
	15019	根方泉遺跡	南長谷字泉	遺物散布地	弥生・近世
	15020	長谷小断跡	南長谷字煙	城郭跡	中世
	15022	土ヶ崎横穴墓群	土ヶ崎二丁目	横穴墓	古墳・古代
3	15023	鶴ヶ城跡	采田一丁目ほか	城郭跡	縄文・弥生・中世・近世
	15025	八森A遺跡	志賀字八森	集落跡	縄文
	15026	八森B遺跡	志賀字八森	集落跡	縄文
	15027	銅谷A遺跡	志賀字銅谷	集落跡・製鉄跡	縄文・近世
	15028	銅谷B遺跡	志賀字銅谷	集落跡・製鉄跡	縄文・近世
	15029	新宮下遺跡	志賀字新宮下	集落跡	縄文
	15030	上根崎遺跡	長岡字根崎ほか	集落跡	縄文・弥生・古代・中世
	15031	引込横穴墓群	土ヶ崎四丁目	横穴墓	古墳
	15032	古閑山遺跡	北長谷字古閑山	遺物散布地	弥生・古墳・古代
	15033	新田遺跡	北長谷字新田ほか	遺物散布地	縄文・古代
	15034	石垣山横穴墓群	朝日一丁目	横穴墓	古墳
	15035	鷲崎横穴墓群	朝日二丁目	横穴墓	古墳
	15036	煙堤上貝塚	北長谷字煙堤上	集落跡・貝塚	縄文・弥生・古墳・古代
	15037	朝日山古墳群	朝日一丁目	古墳・墓・遺物散布地	弥生・古墳・中世・近世
	15038	朝日遺跡	朝日一丁目	遺物散布地	古墳・古代・中世
	15039	岩蔵寺遺跡	志賀字葉藤	集落跡・寺院跡	縄文・古代・中世
8	15040	下野郷館跡	下野郷字館内・館外ほか	城館跡	古代・中世・近世
	15041	白山塚	字朝日	冢	近世?
9	15042	窟外遺跡	下野郷字窟外	遺物散布地	古代・近世
17	15043	じら坂遺跡	下野郷字劍入ほか	遺物散布地	古代
	15044	新館前遺跡	北長谷字煙堤上	遺物散布地	縄文・古代
21	15045	貞山塚(小鬼塚)	用の釜~納屋	運河	近世
	15046	竹倉部遺跡	三色吉字竹倉部	遺物散布地	弥生・古墳・古代
14	15047	新田東遺跡	押分子新田東	遺物散布地	古代・近世
	15048	長塚北遺跡	長岡字北根崎	遺物散布地	縄文・古墳・古代
	15049	南玉崎遺跡	南長谷字北原ほか	遺物散布地	古代・近世
18	15050	西須賀原遺跡	早段字西須賀原ほか	遺物散布地	古代・中世・近世
16	15051	高大廟遺跡	下野郷字高大廟ほか	遺物散布地	古代・近世
	15052	長徳寺前遺跡	長岡字保越	籽塚	近世
	15053	原遺跡	南長谷字中原ほか	遺物散布地	古墳・古代
	15054	中ノ原遺跡	三色吉字中ノ原ほか	塚	中世
4	15055	丸山遺跡	二木二丁目ほか	集落跡	中世・近世
6	15056	竹駒神社境内遺跡	細荷町	社寺跡	中世・近世
13	15057	新筒下遺跡	押分子新筒下ほか	遺物散布地	古代・近世
12	15058	沼前遺跡	押分子沼前ほか	遺物散布地	古代・中世・近世
11	15059	西十手遺跡	押分子西十手ほか	遺物散布地	中世・近世
10	15060	前條遺跡	下野郷字前條	遺物散布地	古代・近世
19	15061	刈原遺跡	早段字刈原ほか	遺物散布地	古代・中世・近世
20	15062	斎原遺跡	寺島字高原	遺物散布地	中世・近世
7	15063	上中筋遺跡	下野郷字上中筋ほか	遺物散布地	古代・中世・近世
	15064	総遺跡	南長谷字総ほか	遺物散布地	縄文・古墳・古代・中世・近世
	15065	柳遺跡	南長谷字柳	遺物散布地	古墳・古代・近世
	15066	台遺跡	南長谷字台	遺物散布地	縄文・弥生・古墳・古代
	15067	長塚遺跡	長岡字台	遺物散布地	縄文・古墳
	15068	上小瀬遺跡	長岡字上小瀬ほか	集落跡	弥生・古墳・古代

にら塚遺跡では土師器、須恵器、製塙土器が採取されており、製塙土器は市内の他遺跡では発見されておらず、製塙集団の活動範囲および活動時期を把握することが今後の大きな課題である（岩沼市史編纂委員会 2015）。

高大瀬遺跡では、平成 25 年（2013）度に実施した矢野目排水機場建設工事に伴う確認調査において、東日本大震災を含め、3 時期の津波の可能性がある堆積物が存在していることを明らかとし、それぞれ慶長 16 年（1611）の津波、貞觀 11 年（869）の津波の堆積物を含んでいる可能性が高いと考えられている。（岩沼市史編纂委員会 2015）。

『延喜式』に東海道の駅家として記載され、多賀城跡より出土した過所木簡（宮城県多賀城跡調査研究所 1985）でもその名が知られる「玉前刻」は、本市の南部（現在の玉崎地区）にその存在が比定され、同地区東側に展開する原遺跡では、平成 17・18 年（2005・2006）度に実施した調査で古代の遺構・遺物が確認されており、駅家関連施設が営まれていた可能性がある（岩沼市教育委員会 2013a・b）。

中世

中世の遺跡は、鶴ヶ崎城跡【3】、丸山遺跡【4】、竹駒神社境内遺跡【6】、下野郷館跡【8】、および西須賀原遺跡【18】が確認されている。鶴ヶ崎城跡では第 4 地点の調査において、15 世紀前半頃の年代観が与えられる青磁盤や常滑焼甕片などが出土し、さらに中世～近世の時期にかけて補・改修されたと推定される土塁が確認された。この土塁の最終形態は基底部 9.3m で、平場内よりの比高差は約 2m を測る（岩沼市教育委員会 2005b）。

丸山遺跡では平成 18 年（2006）度に実施した調査において、遺構には帰属しないものの、白石古窯跡群の製品と推定される甕片が出土した。また市民図書館建設に伴う平成 20 年（2008）度の調査では、ほぼ同位置で重複して作られていた区画性の高い溝跡の最古段階から 13 世紀後半～16 世紀後半にかけての遺物が出土した（岩沼市教育委員会 2010）。

竹駒神社境内遺跡では平成 19 年（2007）度に実施した調査において、文献等の記録では見られない中世段階の区画溝、土坑、および小穴を検出し、貿易陶磁、瓷器系陶器等が出土した。検出した溝は現在まで踏襲される参道を横切ることから、中世期における境内域の建物構成は現在と大きく異なる可能性が考えられている（岩沼市教育委員会 2009、岩沼市史編纂委員会 2015）。

下野郷館跡では平成 12～15 年（2000～2003）度にかけて実施した調査において、13 世紀後半頃の年代観が与えられる白石古窯跡群甕片のほか、12 世紀後半の年代観を有する白磁碗片および 13 世紀代と考えられる青磁碗片が出土したことから、五間堀川の自然堤防上に中世遺跡が営まれていた可能性が考えられる（岩沼市教育委員会 2004a）。

西須賀遺跡では平成 22 年（2010）に実施した調査において、A 区から 16 世紀中頃～17 世紀代と推量される掘立柱建物跡、井戸、小溝状遺構等を検出し、遺物は 16 世紀～17 世紀代の陶器、瓦質土器が出土したことから中世末～近世初頭頃に営まれた集落跡と考えられる（岩沼市教育委員会 2011）。

近世

近世の遺跡は、鶴ヶ崎城跡【3】、丸山遺跡【4】、竹駒神社境内遺跡【6】、下野郷館跡【8】、前條

遺跡【10】、西土手遺跡【11】、沼前遺跡【12】、新筒下遺跡【13】、新田東遺跡【14】、西須賀原遺跡【18】、刈原遺跡【19】、高原遺跡【20】、および貞山堀【21】が確認されている。

鶴ヶ崎城跡ではこれまで4地点で調査を実施しているが、このうち第1地点では東北福祉大学によって調査が行われている（東北福祉大学吉井ゼミナール 2011）。ここでは丘陵頂部の平場で南北に走方向を持つ石列と、これの西側でほぼ併走しながら北側では東側に屈曲する溝跡が確認されている。またこの東側では礎石建物跡や整地面などが確認されている。さらに第5次・第7次では小穴に大堀相馬焼碗を、第6次調査では同じく小穴に大堀相馬焼碗を正位で埋設し、これにかわらけで蓋をするように被せた状態のものが検出されている。この3例は現時点では地鎮関連の遺構として解釈されている（東北福祉大学吉井ゼミナール 2011）。このほか第2地点では掘立柱建物跡、土坑、および近現代の大規模な地形改変の痕跡を確認し（岩沼市教育委員会 2004b）、第3地点では掘立柱建物跡、魚骨を含む溝跡などを検出した（岩沼市教育委員会 2004c）。上記の3地点ではいずれも18世紀後葉～19世紀代の遺物を主体として出土している。

丸山遺跡では平成20年（2008）度に実施した市民図書館建設に伴う調査において、岩沼要害に連なる家中屋敷を区画した溝跡や井戸跡などを検出した。このうち区画溝跡の一部からは19世紀後半を最新の資料とする多量の陶磁器片が出土しているが、幕末から明治初期の動揺を物語る資料として注目される（岩沼市教育委員会 2010）。

竹駒神社境内遺跡では平成19年（2007）度に実施した調査において、礎石建物跡、掘立柱建物跡、柱列跡、通路状遺構、神事関連遺構等を検出し、近世陶磁器、土師質土器、瓦質土器、瓦、土製品、金属製品、および木製品が出土した。本調査により、向唐門の地下構造のほか、江戸期における社寺境内の空間利用のあり方を確認し、これまで伝承、言い伝え、棟札、および古文書などによって語られてきた竹駒神社の歴史を、はじめて考古学的な手法により、その境内変遷の一端を明らかとした（岩沼市教育委員会 2009、岩沼市史編纂委員会 2015）。

下野郷館跡では平成12～15年（2000～2003）度にかけて実施した県道亘理・塩釜線の改良工事に伴う発掘調査において、主に江戸時代の足軽屋敷に関わると考えられる掘立柱建物跡が61棟、井戸跡58基などを検出した。ここで確認された井戸跡は素掘りのものが大半を占めるが、支柱を木材で組み、その外側に竹を立てかけるものを2基確認している。また溝跡は規模や方向から屋敷地や館跡全体を区画する施設の可能性があると考えられる（岩沼市教育委員会 2004a）。

新田東遺跡では平成11・12年（1999・2000）度に実施した調査において、柱穴跡、溝跡、土坑を検出し、近世陶磁器のほか、煙管が出土しており、本遺跡は伊達家家臣である奥山氏の所領の一部に含まれていると考えられることから、同氏に關係する人々の生活痕と推測される（岩沼市史編纂委員会 2015）。

西土手遺跡では平成26年（2014）度に実施した農山漁村地域復興基盤総合整備事業に伴う調査において、近世遺物を含む溝状遺構および近世～近代と考えられる水田耕作土を検出し、出土遺物は江戸時代のものが多数を占めていることを確認した。このことから、近世に遺跡の東隣に屋敷を構え、一帯を拝領していた奥山氏や只木氏との関連が考えられる。（岩沼市教育委員会 2016）。

新筒下遺跡では平成26年（2014）度に実施した農山漁村地域復興基盤総合整備事業に伴う調査に

おいて、大堀相馬焼を主体とした近世陶器が出土したことから、遺跡周辺では江戸時代後期以降から継続して人々が生活を営んできたことが明らかとなった（岩沼市教育委員会 2016）。

刈原遺跡では平成 26 年（2014）度に実施した農山漁村地域復興基盤総合整備事業に伴う調査において、遺跡北側に設定したトレンチから近世陶器が出土し、近世以降に継続的に土地利用がなされていることが明らかとなった。また南側に設定したトレンチから 2 基の農業用水の確保を目的とした水溜施設の可能性が高い遺構が確認された（岩沼市教育委員会 2016）。

高原遺跡では平成 26 年（2014）度に実施した農山漁村地域復興基盤総合整備事業に伴う調査において、同時期に機能していたと考えられる土壘状の高まりと溝跡を検出し、遺跡内の広範囲で近世遺物が出土した。このことから近世段階にこの地に在郷武士、あるいは富裕農民層の屋敷が存在していた可能性が考えられる（岩沼市教育委員会 2016）。

近世初期に開削されたと考えられる貞山堀では、本書に掲載している排水機場復旧事業の調査のほか、護岸施設等の復旧事業でも調査が実施されている。このうち、蒲崎橋より南側の東岸の一部では、市内で唯一の石積みによる護岸施設が確認されているが、断面観察の結果から残存する堤防としては最古段階の護岸施設であることが判明している。

西須賀原遺跡では平成 22 年（2010）度に実施した玉浦中部地区経営体育成基盤整備事業に伴う調査において、A 区で中世末～近世初頭頃の掘立柱建物跡群とその前面では畑作に関連すると考えられている小溝状遺構群を検出した。また B 区では 18 世紀前半～19 世紀後半にかけて営まれた 19 基の墓壙を検出した。この墓壙群では 168 枚の錢貨を副葬した事例、寛永通寶鉄波錢と供伴して眼鏡が出土した事例、幼児を納めた棺内を多量の穀殼で充填した事例などを確認している。また遺構の重複関係から埋葬形態が直葬墓から円形木棺墓へ、そして方形木棺墓へ変遷していく過程がとらえられている（岩沼市教育委員会 2011）。

【引用・参考文献】

- 岩沼市 1992 『岩沼市土地分類調査（細部調査）報告書・現況調査編』
- 岩沼市教育委員会 2004a 『下野郷跡』 岩沼市文化財調査報告書第 2 集
- 岩沼市教育委員会 2004b 『鶴ヶ崎城跡・第 2 地点』 岩沼市文化財調査報告書第 3 集
- 岩沼市教育委員会 2004c 『鶴ヶ崎城跡・第 3 地点』 岩沼市文化財調査報告書第 4 集
- 岩沼市教育委員会 2005a 『長徳寺前遺跡』 岩沼市文化財調査報告書第 5 集
- 岩沼市教育委員会 2005b 『鶴ヶ崎城跡・第 4 地点』 岩沼市文化財調査報告書第 6 集
- 岩沼市教育委員会 2007 『朝日古墳群』 岩沼市文化財調査報告書第 7 集
- 岩沼市教育委員会 2009 『竹駒神社境内遺跡』 岩沼市文化財調査報告書第 8 集
- 岩沼市教育委員会 2010 『丸山遺跡』 岩沼市文化財調査報告書第 9 集
- 岩沼市教育委員会 2011 『西須賀原遺跡』 岩沼市文化財調査報告書第 10 集
- 岩沼市教育委員会 2012 『上根崎遺跡』 岩沼市文化財調査報告書第 11 集
- 岩沼市教育委員会 2013a 『東日本大震災復興関連埋蔵文化財調査報告書 I』 岩沼市文化財調査報告書第 12 集

- 岩沼市教育委員会 2013b 『東日本大震災復興関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』 岩沼市文化財調査報告書第13集
- 岩沼市教育委員会 2016 『東日本大震災復興関連埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』 岩沼市文化財調査報告書第14集
- 岩沼市史編纂委員会 1984 『岩沼市史』 岩沼市
- 岩沼市史編纂委員会 2015 『岩沼市史』第4巻 資料編I 考古 岩沼市
- 岡田清一 2010 「岩沼市旧名取郡閑連中世史料(稿)」『東北福祉大学岡田ゼミナール第16回地域調査報告会』資料集
- 鍛治一郎・佐藤宏一他 1962 「宮城県岩沼町丸山横穴古墳群」『東北考古学』第3号
- 川又隆央 2005a 「塗場研究の方法」『遺跡研究の方法』東北中世考古学会第12回大会資料集
- 川又隆央 2005b 「宮城県の縄石経塚」『宮城考古学』第7号
- 菊地逸夫 2003 「陸奥の陶器生産・一本杉窯跡群」『中世奥羽の土器・陶磁器』 東北中世考古学会編
- 佐藤敏幸・大久保弥生 2007 「宮城県の湖西産須恵器」『宮城考古学』第9号
- 東北福祉大学吉井ゼミナール 2011 『鶴ヶ崎城跡(岩沼要害)第10次発掘調査報告書』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1985 『宮城県多賀城跡調査研究所年報1984 多賀城跡』

第Ⅲ章 貞山堀の調査

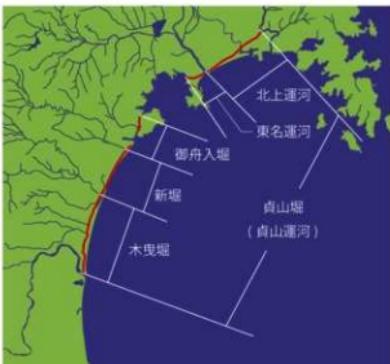
1. 岩沼市域の貞山堀の被害状況（第5図）

宮城県の沿岸部には、阿武隈川の河口である岩沼市に端を発し、塩釜市牛生までに至る総長約33kmの「貞山堀」が存在する（現在は仙台市蒲生地区周辺で仙台新港建設の際に埋め立てが行われており、全区間で開通していない）。この貞山堀は現在の海岸線から約0.5km内陸側で、ほぼ海岸線に沿うように開削されたものであり、当市域に属する区間のうちの中央から南部にかけては左岸堤防上の松並木が水面に映える風光明媚な文化的景観を保っていたことが広く知られていた。

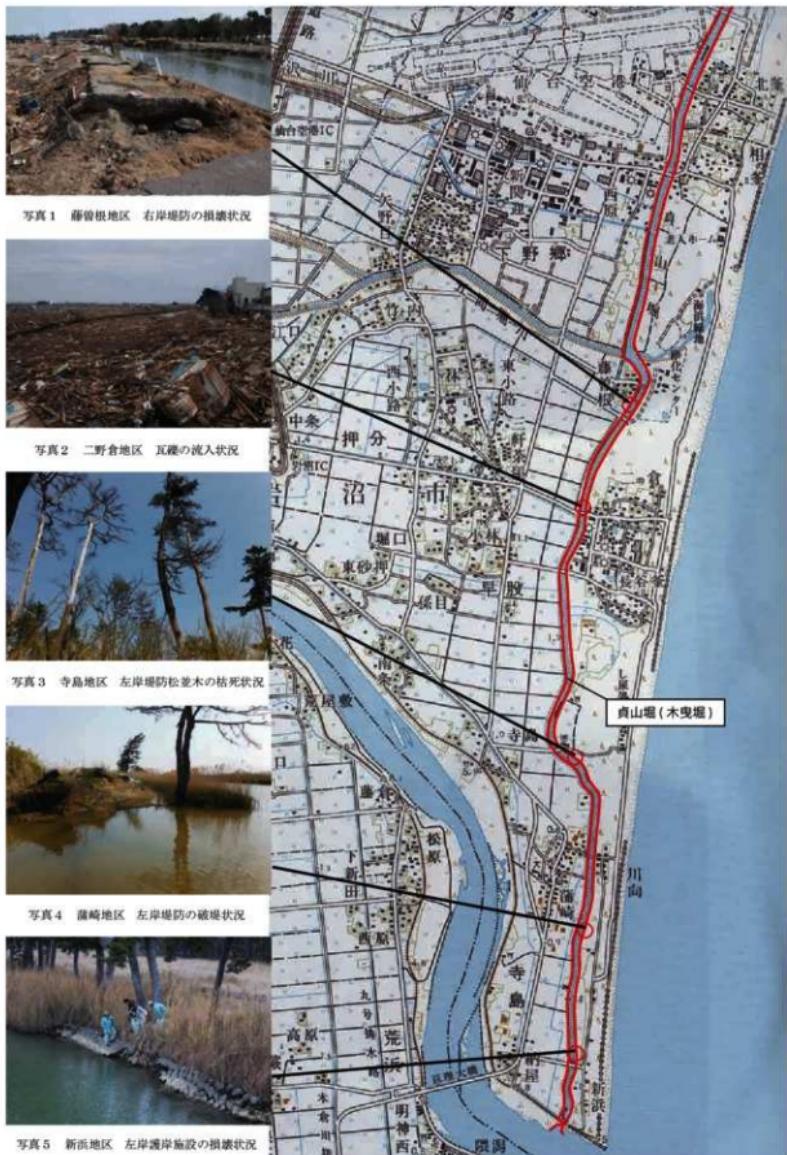
平成23年（2011）3月11日午後2時46分に発生した東北地方太平洋沖地震に伴う大津波によって、岩沼市東部地区は多数の人命をはじめとし、人家や農地にも多大な被害を及ぼした（岩沼市2011）。この大震災はまた、大津波によって阿武隈川や五間堀川などの河川護岸施設、および排水施設にも甚大な損傷を与えたほか、地盤沈下を引き起こしたことにより各所で排水路が損壊し、内陸側からの排水についても機能不全に陥った。海岸線に並行して走る貞山堀についても、震災当初は津波が沿岸部に存在していた相野釜、藤曾根、二野倉、長谷釜、蒲崎、新浜の6集落を飲み込んだことから、建築部材をはじめとする大量の瓦礫が流入したほか、1箇所の破堤被害をはじめとし、橋梁部などを中心とした護岸施設、東側の後背湿地からの排水のために設置されていた樋管の損壊が各所で見られた。このほか、貞山堀の代表的な景観の一つとして親しまれてきた松並木についても、流失あるいは津波後に枯死するものが相次ぐこととなり、景観の保全、回復が復興事業の中でも課題として取り上げられている（宮城県土木部2013）。

2. 岩沼市域における貞山堀の沿革（第4図）

岩沼市域を走る貞山堀の開削時期については諸説あるが、仙台藩初代藩主である伊達政宗の治世下である慶長年間とする説が、現時点では最も有力である（遠藤剛人1989、渡辺信夫1994など）。初期の開削工事については、阿武隈川河口である岩沼市寺島字蒲崎から名取川河口である名取市閑上までの区間を最初に着手、完成したことが、正保年間に描かれたと考えられる『陸奥国仙台領國絵図』（仙台市博物館所蔵）での記載から判断できる。工事に際しては土木技術に精通していた長州浪人である川村孫兵衛重吉が伊達家に召し抱えられた後に、名取郡早股村（現・岩沼市）内に所領を拝領していたことから、この人物を中心に工事が行われていたことが『宮城県土地改良史』（宮城県土地改良史編纂委員会1994）などで推察されているが、裏付けとなる文献史料はこれまでのところ認められていない。この運河開削の目的としては、第一には



第4図 貞山堀の位置と区分



第5図 岩沼市内における貞山堀の被害状況

開削時期が仙台城下の整備・拡張期と重なることから、木材をはじめとした物資を外洋を経ずに安全に搬入するため、第二には仙台湾沿岸部で広域的に存在していた湿地を新田開発する際の排水機能を担っていた可能性が考えられている（渡辺 1994）。さらに震災後には慶長 16 年（1611）に発生した慶長三陸津波に見舞われた仙台藩が、復興事業の一つとして貞山堀の開削を行った可能性を示唆する見解（佐藤昭典 2015）も示されている。なお、江戸期にはこの区間の名称は「内川」（『陸奥国仙台領国絵図』）や「木引堀」（『渡辺家文書目録』）、「木ヒキ堀」（『阿武隈川絵図』）と呼称されていたと考えられる（馬場俊介 2014）。また当時の川幅は最大でも 15 m 程度であったことが、明治 10 年頃に作成された『宮城縣地誌』の記載から推量されている（遠藤 1989）。

明治期になると、鳴瀬川の河口に位置する東松島市野蒜地区を東北地方太平洋側の主要港とする計画が明治政府によって策定され、明治 11 年（1879）から築港工事が実施された。これに伴い、物資を円滑に輸送できるように当市域を含めた貞山堀の改修事業が、明治 16～22 年（1883～89）にかけて実施された。このうち明治 19 年（1886）には、当時の県令であった松平正直が工事の視察に訪れており、蒲崎付近での掘削工事の様子や宮城縣集治監の囚人が使役されていたことが報じられている（奥羽日日新聞 1986）。当時の工事は過酷を極めたようであり、死亡した囚人の墓碑が当市寺島字蒲崎に所在する専光寺境内にかつては存在していた（岩沼市 1984）ようであるが、東日本大震災以降は所在が不明となっている。なお、「貞山堀」という名称は明治 13～14 年（1880～81）頃に宮城県の土木課長であった早川智寛が、この一大運河建設事業は仙台藩初代藩主である伊達政宗の悲願であったことに思いを馳せ、その法名の文字から名付けたことは広く知られるところである。その後、明治時代～昭和 30 年代までは仙台市・多賀城市・塩竈市付近での改修工事計画などは記録に残されているが、岩沼市～名取市の区間では工事が行われた記録は見当たらぬ。

当市区間の貞山堀における明治時代以降の歴期としては、昭和 42～56 年（1967～81）にかけて実施された国営事業である「国営名取土地改良事業」が行われたことである。この事業は、岩沼・名取東部では 100ml 程度の降雨でも水田が冠水し、また洪水などの際には貞山堀へ阿武隈川・名取川の両河川が逆流して水位が高くなり湛水被害が相次いだことを受けて、貞山堀周辺の排水不良地の改良と併せて用排水施設の新設・改修を行ったものである。なお、この事業推進の背景にあるものは昭和 36 年（1961）に制定された「農業基本法」である。

事業開始に至るまでの岩沼市・名取市の地区の動向をみると、昭和 27 年（1952）に岩沼・名取の市町村長、農業団体有志によって「名取耕土土地改良事業期成同盟会」が設立され、昭和 34 年（1959）から国営事業として各種の調査等を開始、そしてこれらが終了した昭和 42 年（1967）から事業を開始している。この事業によって五間堀川との合流地点より北では川幅が 51 m へ拡幅され、また堤防の嵩上げも実施されている。合流地点より南側では西岸堤防において堤防嵩上げ、そして護岸施設としてコンクリート加压矢板を水際に設置するなどの工事が施工され、東岸では長谷釜付近までがコンクリート加压矢板が設置された。また相の釜・藤曾根の両排水機場も設置され、内水被害は飛躍的に減少した。しかしながら反面で、この事業の実施により明治から続く貞山堀の面影が、ごく一部を残して姿を消した。なお、五間堀川合流地点南側の工事については西岸を名取土地

改良区、東岸を宮城県が担当しているが、長谷釜以南の東岸での施工については範囲、工法とも明確に判断できる資料は現時点まで見当たらない。

平成に入ってからも貞山堀では主に水際の護岸を目的とした改修が数度実施されているが、いずれも小規模なものに留まっていた。しかしながら、平成 23 年（2011）3 月 11 日に発生した東日本大震災によって大きな被害を受けたことから、現在貞山堀の全区間で大規模な災害復旧事業が進展中である。時代とともにその姿を変えてきた貞山堀であるが、その中でも最大の画期を今、迎えていると言えよう。

3. 調査に至る経緯と経過

前述のとおり、貞山堀では昭和 42 年（1967）以降に国営事業として「国営名取土地改良事業」が行われたが、中でも貞山堀西側に広がる水田地帯の冠水被害を防ぐことを期待された排水機場の設置・稼働は、この地域の農業従事者たちに大きな恩恵をもたらしてきた。しかしながら、東北地方太平洋沖地震に伴う津波により、当市域に設置された相の釜排水機場、藤曾根排水機場の両者は機場内の機械、および電気施設が水没によって機能不全に陥った。また機場へと至る排水路についても、津波による洗掘や地盤沈下の影響により、各所で大きく損壊した。

これら排水施設が被った甚大な災害被害からの復旧を図ることは、浸水被害を受けた岩沼市東部地区全域が復興していく上では喫緊の課題のひとつであった。このため、東北農政局仙台東土地改良建設事務所 名取川土地改良建設事業建設所（以下、「名土建」と記す）では、他の貞山堀関連の事業の中では最も早く事業計画が策定された。

平成 24 年（2012）4 月、名土建より相の釜排水機場災害復旧計画が、埋蔵文化財への影響を及ぼすことについての照会が岩沼市教育委員会生涯学習課（以下、「市教委」と記す）へ寄せられた。市教委では当該工事が高大瀬遺跡、および貞山堀へ影響が及ぶことが想定されることから、宮城県教育委員会文化財保護課（以下、「県教委」と記す）と協議が必要となる旨を回答した。その後、5 月 30 日付けで協議書が提出されたことを受けて、6 月に県教委と名土建、市教委の 3 者による現地協議を行い、県教委より貞山堀堤防を開削する工事については確認調査を実施すること、という指示を受けた。なお、高大瀬遺跡については工事計画箇所が低地部であると判断されたことから、協議の対象からは除外した。続いて 8 月 3 日付けで藤曾根排水機場、および同排水機場の効用回復を目的として新たに二野倉橋南側で設置が決定した三軒茶屋排水機場、そして貞山堀堤防の西側に存在していた排水路災害復旧事業についての協議書が提出され、県教委より藤曾根・三軒茶屋排水機場については確認調査の指示があり、排水路部分については遺跡への影響は無いとの判断から協議の対象からは除外した。その後、12 月 13 日付けで文化財保護法第 94 条に基づく発掘通知が提出され、調査の開始時期や方法について名土建・市教委で協議を行い、事業の進捗状況に合わせて最初に藤曾根排水機場地点、続いて相の釜排水機場地点、そして三軒茶屋排水機場地点で調査を実施する運びとなった。

新規排水施設の堤防開削に伴う藤曾根排水機場地点の調査は、平成 25 年（2013）3 月 4 日から開始し、3 月 26 日まで断続的に実施した。相の釜排水機場地点の調査は、平成 25 年（2013）4 月 9 日、

そして三軒茶屋排水機場地点の調査は、平成 25 年(2013)11 月 7 日にそれぞれ実施した。

また既存施設である藤曾根、相の釜の両排水機場では、貞山堀への排水施設の撤去についても堤防開削を伴うことから平成 26 年(2014)10 月に協議を行い、11 月 12 日付けで協議書が提出され、県教委より工事立ち合いの指示があった。12 月 3 日付けで発掘通知が提出されたのち、まず 12 月 13 日に旧藤曾根排水機場、次に 12 月 16 日に旧相の釜排水機場で工事立ち合いを実施している。

4. 各地点の調査成果

a. 藤曾根排水機場地点(第 6・7 図)

藤曾根排水機場地点の調査は、堤防上に存在していたアスファルト路盤を除去し、また工事で使用する大型クレーン車などの重機が安全に稼働するために堤防西側に盛土を行った後、新排水路を掘削するのに合わせて平成 25 年(2013)3 月 4 日から実施した。掘削幅は東西約 15 m、南北約 9 m である。工事の関係、および安全面の配慮から、昭和 42 年(1967) 以降の「国営名取土地改良事業」で築堤された堤防上面より 2 m までの掘削を一次調査とし、この時点で堤防断面の詳細な観察、および断面図作成、そして土層注記を実施した。これより下位の二次掘削時調査については、土留めのためのシートパイルが設置されたことから、作業中に壁面崩落の危険性が高まることを考慮して断面図の作成は断念し、掘削時に堤防下位の状況の確認を主眼とする立ち合いを実施した。

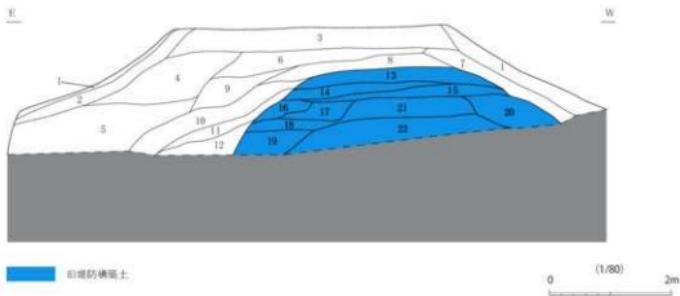
一次調査時の断面観察の結果では、最も新しい段階の堤防構築土(1~12 層)の下位で、これらに被覆される旧堤防構築土(13~22 層)が存在していたことが確認された。特に 13 層は砂利層であり、ある時期に堤防上面を通路として利用していた際の痕跡と考えられる。旧段階の堤防法面には、本来ならば表土が存在するべきであるが、今回の貞山堀復旧事業での施工方法を参照すると、すべての区間で法面を被覆している表土を除去したのちに本体工事に着手している。新堤防築堤時にも同様の施工方法が採択されたことから、断面観察では旧表土が確認できなかった可能性が高い。また掘削時の底面では部分的に褐色砂が確認されていたが、二次掘削では褐色砂層が厚く堆積していることが確認された。この褐色砂は仙台湾沿岸部で顕著に発達する浜堤の形成砂と考えられることから、浜堤上に築堤したと考えられる。なお、新堤防築堤で施工したコンクリート加圧矢板設置に伴う埋土を河川側で確認しているが、それ以外の堤防構築時の土留め等の痕跡は二次掘削時、および既設排水施設の撤去時に実施した工



写真 6 藤曾根排水機場地点位置図



写真 6 被災直後の藤曾根排水機場



第7図 藤曾根排水機場地点堤防断面図

藤曾根排水機場地点 土層注記

層 No.	土色	土質	特徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト 表土
2	黄褐色	10YR5/6	粘質シルト 暗灰岩塊、碎石をやや多く含む
3	鉢石		
4	暗褐色	10YR3/3	黒褐色粘土の小ブロック、砂利をやや多く含む
5	暗褐色	10YR3/3	黒褐色粘土ブロックを少量含む
6	にぶい黄褐色	10YR5/3	極めて硬化する。碎石を少量含む
7	暗褐色	10YR3/3	砂利をやや多く、黒褐色粘土粒を少量含む
8	暗褐色	10YR3/3	しまり弱い。にぶい黄褐色粘土粒を少量含む
9	褐色	7.5TR4/3	黒褐色粘土、砂利をやや多く含む
10	黒褐色	10YR3/2	黒褐色粘土を少量含む
11	黒褐色	10YR3/2	しまりやや強い。褐色粘質シルトの中ブロックを少量含む
12	褐色	10YR4/4	粘質シルト 黒褐色粘質シルトの中ブロックを少量含む
13	鉢石		
14	褐色	10YR4/4	細粒砂主体。砂利を少量含む
15	褐色	10YR4/4	しまり強い。細粒砂主体。暗褐色粘質シルトの中ブロックを少量含む
16	褐色	10YR4/4	しまり強い。細粒砂主体。黒褐色粘質シルト塊を微量含む
17	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト 暗褐色粘質シルトの中ブロックを少量含む
18	黒褐色	10YR3/2	しまり弱い。褐色砂をやや多く含む
19	褐色	10YR4/4	砂質シルト 黑褐色粘質シルトの小ブロックを少量含む
20	褐色	10YR4/4	細粒砂主体。層中に明褐色粘質シルトを帯状に含む
21	暗褐色	10YR3/3	硬化した赤褐色砂。暗褐色砂を少量含む
22	褐色	10YR4/4	黒褐色粘質シルトの中ブロックをやや多く含む



写真7 堤防断面の様子(北から)

事立会では認められなかった。

b. 相の釜排水機場地点（第8・9図）

相の釜排水機場地点の調査も藤曾根排水機場地点と同様に、堤防上に存在していたアスファルト路盤を除去し、また工事で使用する大型クレーン車などの重機が安全に稼働するために堤防西側に盛土を行った後、新排水路を掘削するのに合わせて平成25年(2013)4月9日に実施した。掘削幅は東西約15m、南北約9.4mである。工事の関係、および安全面の配慮から現在の堤防上面より2mまでの掘削を一次調査とし、この時点で堤防断面の詳細な観察、および断面図作成、そして土層注記を実施した。これより下位の二次掘削時調査については、土留めのためのシートパイルが設置されたことから、作業中に壁面崩落の危険性が高まることを考慮して断面図の作成は断念し、掘削時に堤防下位の状況の確認を主眼とする立ち合いを実施した。

一次調査時の断面観察の結果では、新旧二時期の堤防が存在していたことが明らかとなつた。新しい段階の堤防構築土の1～4層は、旧堤防を被覆して築堤していた。旧堤防は藤曾根排水機場地点とは異なり、堤防上を掘削されたことにより旧路盤等の痕跡は確認できず、また堤防築堤時には砂と粘土を互層状に突き固めたような痕跡(6層)も一部で確認されている。

また一次掘削時の底面では部分的に褐色砂が確認されていたが、二次掘削時の立会いによってこの砂層が浜堤を形成している砂と判断でき、砂層は東側にかけて傾斜していることから、東側に存在した堤間湿地を臨む高地上に築堤したものと考えられる。なお、新堤防築堤で施工したコンクリート加压矢板設置に伴う埋土を河川側で確認しているが、それ以外の堤防構築時の土留め等の痕跡は二次掘削時、および既設排水施設の撤去時に実施した工事立会では認められなかった。

c. 三軒茶屋排水機場地点（第10・11図）

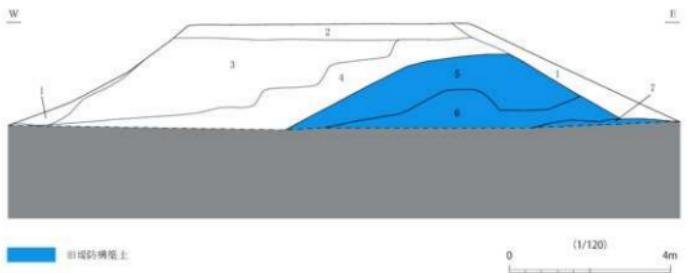
三軒茶屋排水機場地点の調査は、昭和42年(1967)以降の「国営名取土地改良事業」では堤防上は未舗装であり、堤防上端部の幅が狭く、大型クレーン車などの工事車両が稼働するスペースが確保できなかった。このため調査前には、まず現在の堤防を約1.2m切り下げ、西側法面に厚く盛土を貼り増しし、さらに掘削をする範囲のシートパイルを敷設した後、平成25年(2013)11月7日に



第8図 相の釜排水機場地点位置図



写真8 旧相の釜排水機場と津波による洗掘
で破壊された排水路



第9図 相の釜排水機場地点堤防断面図

相野釜排水機場地点 土層注記

層No.	土色	土質	特徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト 表土
2	暗褐色	10YR3/3	シルト 表土
3	砂石		
4	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト オリーブ黒色粘土の中ブロックを多量含む
5	明黄褐色	10YR6/6	褐色粘土粒をやや多く含む。しまり強い
6	褐色	10YR4/4	成堤形成砂。細粒砂主体。層中に薄い帯状の黒色砂を複数枚含む
7	オリーブ黒色	5Y3/1	黒色粘土、褐色砂の中ブロックを多量含む



写真9 堤防断面の様子（南から）



写真10 堤防断面精査風景（西から）



写真11 工事立会の様子（北から）

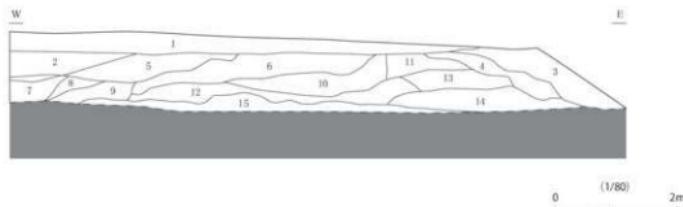
掘削を開始した。掘削幅は東西約14m、南北約10mである。

掘削開始から約1.5mまで掘り下げた段階で、水田耕作土と考えられる粘質土が全体的に広がることを確認し、この時点で堤防断面の詳細な観察、および断面図作成、そして土層注記を実施した。

断面観察の結果では盛土の土質は異なるものの、旧路盤の存在や法面の存在を伺えるようなラインは認められず、水田耕作土(15層)の上に直接盛土をして築堤していたことが明らかとなった。なお、新堤防築堤で施工したコンクリート加圧矢板設置に伴う埋土を河川側で確認しているが、それ以外の堤防構築時の土留め等の痕跡は一切認められなかった。



第10図 三軒茶屋排水機場地点位置図



第11図 三軒茶屋排水機場地点堤防断面図

三軒茶屋排水機場地点 土層注記

層No.	土色	土質	特徴
1	明黄褐色	10YR7/6	砂 工事用盛土
2	砂石		
3	にぶい黄橙色	10YR6/3	粘質シルト 凝灰岩小塊をやや多く含む
4	にぶい赤褐色	5YR5/4	粘質シルト しまり弱い。砂利をやや多く含む
5	赤褐色	2.5YR4/6	粘質シルト しまり強い。砂利をやや多く、黒褐色粘土中ブロックを少量含む
6	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト しまり極めて強い。砂利を多量含む。黄褐色粘質シルトブロックをやや多く含む
7	オリーブ黒色	7.5Y3/1	砂土 やや粗めの暗緑灰色砂を少量含む
8	黒褐色	2.5Y3/1	暗褐色粘土ブロックを少量、植物遺体を微量含む
9	灰黒褐色	10YR2/2	酸化鉄をやや多く、黒色砂を微量含む
10	灰黄褐色	10YR4/2	しまり極めて強い。酸化鉄を多量、炭化物を少量含む
11	オリーブ黒色	7.5Y3/2	砂利を少量、暗褐色粘土ブロックを微量含む
12	オリーブ黒色	10Y3/1	暗灰黄色粘土ブロックを多量、酸化鉄を少量含む
13	オリーブ黒色	7.5Y3/1	暗褐色粘質シルトの小ブロックをやや多く、炭化物、砂利を少量含む
14	オリーブ黒色	5Y3/1	褐灰色微粒砂をやや多く、にぶい黄褐色粘質シルト粒を少量含む
15	暗緑灰色	5G3/1	粘性極めて強い。上位に酸化鉄をやや多く集積し、植物遺体を微量含む



写真 12 堤防断面の様子（南から）

5.まとめ

今回の調査は、市域内の貞山堀では初めての考古学的な調査事例となった。調査対象となった貞山堀西岸は、昭和42年(1967)以降の「国営名取土地改良事業」の実施の際にコンクリート加圧矢板による護岸工事が行われており、また河道の拡幅工事も併せて行われていることから、当初は昭和42年以前の堤防構築土はすべて失われた可能性が高いと思われていた。しかしながら、水際での護岸痕跡は失われていたものの、藤曾根・相の釜の両排水機場地点では旧堤防構築土の上に新たに貼り増して新堤防を築堤していたことが判明した。残念ながら旧堤防構築土中からは遺物は発見されていないため、築堤時期について物的証拠は得られていないが、この区間内での大規模な改修事業は昭和42年以前では明治16～22年(1883～89)にかけて実施した記録のみであることから、現時点では調査で確認された旧堤防の築堤時期についてはこの時期の所産と捉えておきたい。なお、堤防後背地からの排水施設である樋管改修工事に併せて平成26年(2014)度から実施している調査では、数地点で新旧2時期の堤防構築土の存在が明らかとなっている。これらについては今回の調査成果と併せて調査終了後に改めて報告を行う予定である。

【引用・参考文献】

- 岩沼市 1984 『岩沼市史』 岩沼市史編纂委員会
- 岩沼市 2011 『岩沼市復興計画マスタートップラン』
- 遠藤剛人 1989 『貞山・北上運河沿革考』
- 佐藤昭典 2007 『利水・水運の都 仙台』 国宝大崎八幡宮 仙台・江戸学叢書2
- 佐藤昭典 2015 『慶長大津波と運河 仙台湾岸 貞山運河のうち木引堤物語 その謎多き運河史』
- 東北農政局名取川農業水利事業所 1986 『なとりがわ』
- 馬場俊介 2014 『近世以前の土木・産業遺産』
- 三原良吉 1976 『貞山堀運河』 宮城県文化財調査報告書第43集
- 宮城県土地改良史編纂委員会 1994 『宮城県土地改良史』 宮城県
- 宮城県土木部 2013 『貞山運河再生・復興ビジョン』
- 渡辺信夫 1994 「木曳堀・御舟入堀の開削をめぐって」『市史せんだい』vol.4 仙台市

第IV章 高大瀬遺跡隣接地（西原地区）の調査

1. 遺跡の位置と環境（第12図）

高大瀬遺跡隣接地（西原地区）は、JR岩沼駅より北東へ約5.6km、仙台空港ターミナルビルより南西約1.4kmに位置し、地形的には仙台平野沿岸部で海岸線にそって発達する浜堤列のうち、標高0.9mほどの第Ⅲ浜堤列上に立地する。遺跡内の現状は宅地、畠地、雑種地である。

同地は、高大瀬遺跡北側に隣接していることから、同遺跡で確認されている古代および近世の遺物、東日本大震災を含め慶長16年（1611）および貞観11年（869）の津波によって形成された可能性がある3時期の津波の堆積物が残存している一連の遺跡の可能性がある。



第12図 高大瀬遺跡（西原地区）位置図

2. 調査に至る経緯と調査方法（第13図）

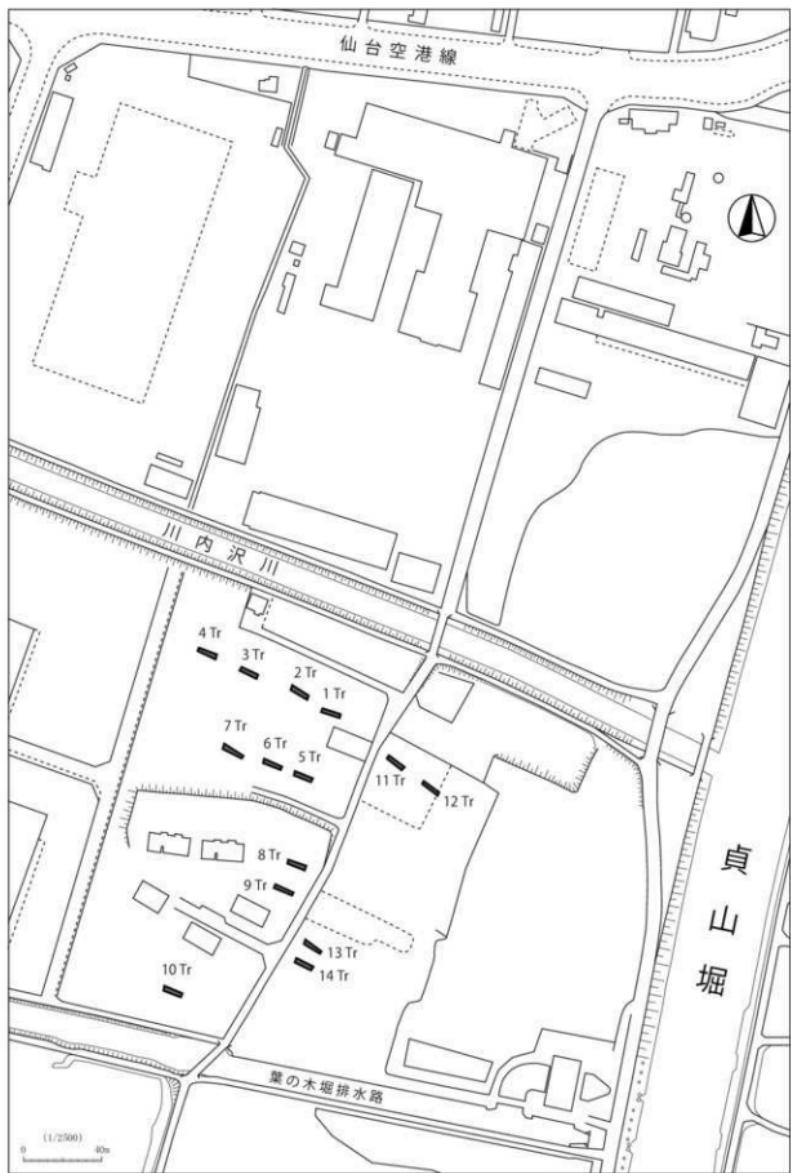
平成26年（2014）11月7日に、岩沼市役所市民経済部商工観光課産業立地推進室より府内関係各課に対し、下野郷字西原地区に存在する防災集団移転跡地を活用するため、企業誘致を目的とした造成事業計画が示され、課題等についての協議が行われた。生涯学習課では対象地が高大瀬遺跡に近接し、地形的にも同一の浜堤上での開発計画であることから、周知の埋蔵文化財包蔵地では無いものの、遺構・遺物が存在した場合には遺跡への影響は避けられず、開発計画のスケジュールや工法の見直しも必要となることから、事前に遺跡の有無を確認するための試掘調査が必要である旨を回答した。その後、開発計画についての地権者等との協議が終了するなど調査環境が整ったことから、平成27年（2015）6月23日より調査を開始した。

調査地点は開発対象範囲のうち、生活痕跡が存在している可能性が高い浜堤上を中心を選定した。調査は、長軸約10m、短軸約2.2mの長方形形状の調査区（以下、「トレンチ」と表記）を14箇所設定し、重機を用いてトレンチ内の表土除去を行った。その後、人力により遺構確認面とした第Ⅲ浜堤列形成砂上面で精査を実施し、全景撮影を行った。また併せてトレンチごとに土層断面図の作成、そしてトレンチ設定箇所の測量を実施した。調査最終日である7月2日には、再度重機を搬入して埋め戻しを行い、現状に復している。

3. 成果概要

1 トレンチ（第14図）

1トレンチは、現地表面の海拔1.3mの地点に東西9.9m、南北2.2mの規模で設定した。約40cm程度の厚みを持つ搅乱（碎石）、暗褐色砂質土（1・2層）などの表土を除去した下位で、第

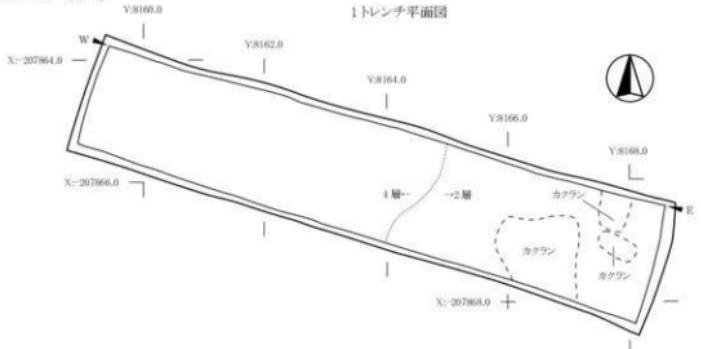


第13図 トレンチ配置図

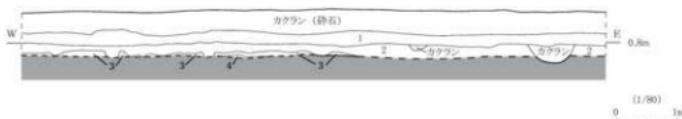
III浜堤列形成砂に近似する褐色砂質粘土（4層）がトレンチ中央から西側で検出されている。またトレンチ東側では4層上面と同レベルで2層の抜がりが確認できることから浜堤列が東側に向かつて落ち込んでいる可能性が考えられる。一方で4層は浜堤列形成砂に近似しているが、土質が砂質粘土であることから1～3層と同様に整地の際の造成土の可能性もある。海拔0.6m付近で検出した4層上面で遺構精査を行ったが、遺構・遺物は確認されていない。



写真13 1トレンチ（東から）



1トレンチ北壁東西セクション



1トレンチ土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3D)	砂質土。しまり強い。礫を少量。粘土板を極少量含む。
2	暗褐色	(10YR3/3D)	砂質土。しまり強い。黄褐色砂を微量。下層の3層を粒状に少暈含む。
3	黒褐色	(10YR2/2D)	しまりやや弱い。粗粒板をやや多く。オリーブ黑色砂質土を少量含む。
4	褐色	(10YR4/4)	しまり強い。褐色板を多量含む。

第14図 1トレンチ

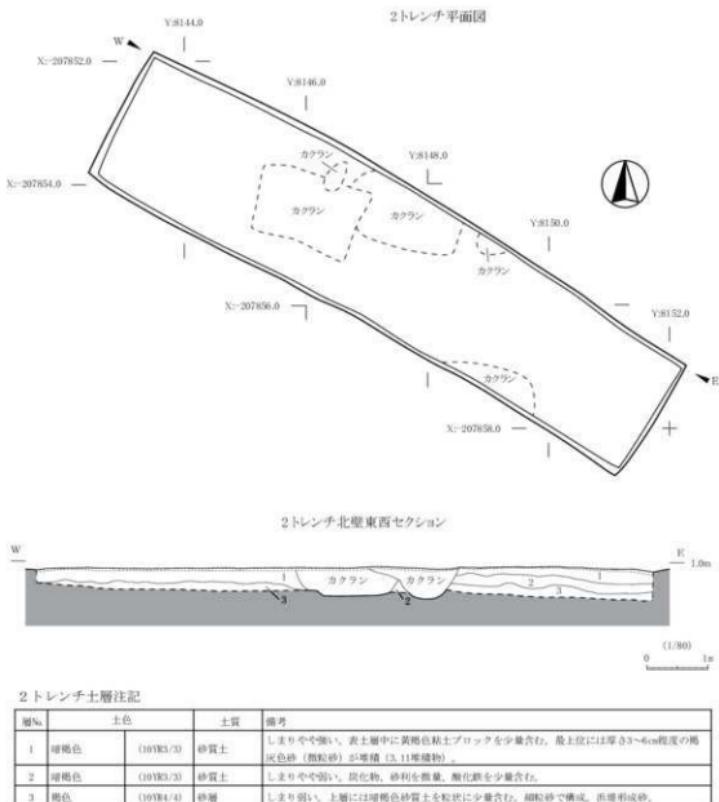
2トレンチ（第15図）

2トレンチは、現地表面の海拔0.9mの地点に東西10.1m、南北2.2mの規模で設定した。約20～40cm程度の厚みを持つ暗褐色砂質土（1・2層）などの表土を除去した下位で、第III浜堤列形成砂である褐色砂が検出されている。また1層最上位では東日本大震災の津波により堆積した褐

灰色砂が確認されている。浜堤列形成砂である3層上位には暗褐色砂質土が含まれ、漸移層の可能性があることから、褐色砂が均質となる海拔0.5m付近の面まで掘り下げて遺構精査を行ったが、遺構・遺物は確認されていない。



写真 14 2トレンチ (東から)



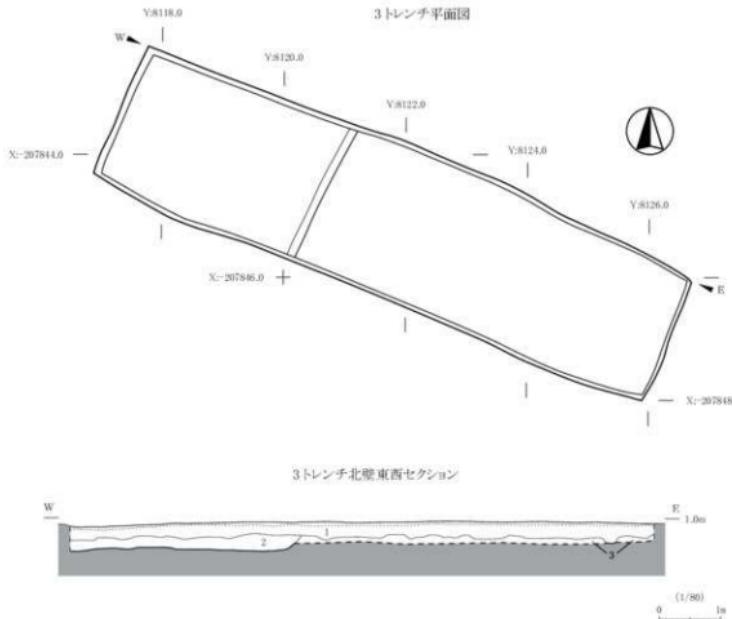
第15図 2トレンチ

3トレンチ（第16図）

3トレンチは、現地表面の海拔0.9mの地点に東西9.7m、南北2.2mの規模で設定した。約25cm程度の厚みを持つ暗褐色砂質土（1層）などの表土を除去した下位で、第III浜堤列形成砂である褐色砂がトレンチ中央から東側で検出されている。またトレンチ西側では3層上面と同レベルで2層の拡がりが確認できることから、浜堤が西側に向かってゆるやかに落ち込んでいる可能性が考えられる。2トレンチ同様、1層最上位では東



写真15 3トレンチ（西から）



3トレンチ土層注記

層番	土色	土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	砂質土 しまりやや強い。砂利、炭化物を少暈含む。下層には黄褐色砂がやや多く混入。最上位には厚さ3~6cm程度の褐色砂（微粒砂）が堆積（3.11堆積物）。3.11堆積物との境ではビニールやプラスチックなどが水平に堆積している。
2	暗褐色	(10YR3/3)	砂質土 しまりやや強い。酸化鉄をやや多く含む。3層をブロック状に侵入している箇所もみられる。
3	褐色	(10YR4/4)	砂層 しまり弱い。細粒砂、中粒砂。水磨した砂利がやや多くみられる。浜堤相成砂。

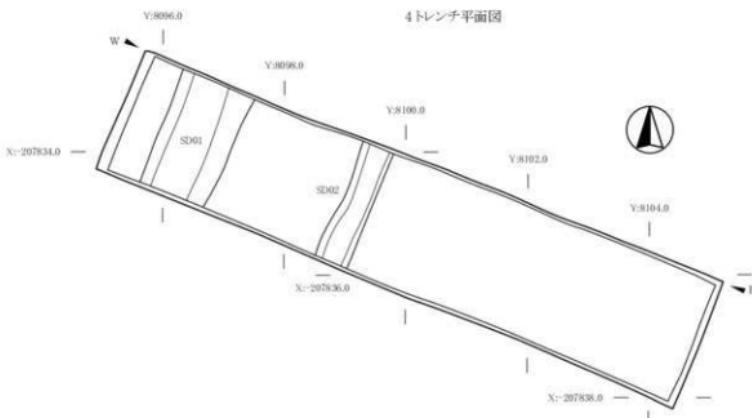
第16図 3トレンチ



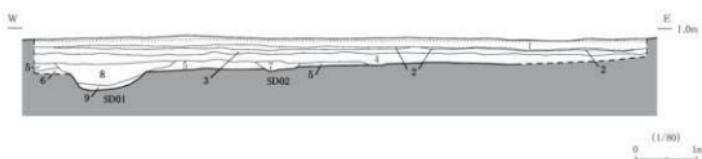
写真 16 4トレンチ（西から）



写真 17 SD 1（南から）



4トレンチ北壁東西セクション



4トレンチ土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3) 砂質土	しまりやや強い、砂利、酸化物を少額含む。下層には黄褐色砂がやや多く混入。3.11層との境ではビニールやプラスチックなどが水平に堆積している。
2	灰黃褐色	(10YR4/2) 砂層	細粒砂主体。暗褐色粘土粒を微量含む。
3	暗褐色	(10YR3/3) 砂質粘土	しまりやや弱い、酸化鉄を多量含む。
4	灰い赤褐色	(10YR5/3) 砂質土	しまりやや弱い、褐色色粘土粒をやや多く、酸化鉄を多量含む。
5	黒褐色	(10YR2/2) 砂質土	しまりやや弱い、黄褐色砂をブロック的に、酸化鉄を少額含む。
6	灰黃褐色	(10YR4/2) 砂層	細粒砂主体。酸化鉄をやや多く含む。出露形成。
7	黒褐色	(10YR3/1) 砂質土	しまりやや弱い、暗褐色粘土粒、黄褐色砂を少額含む(SD02)。
8	暗褐色	(10YR3/3) 砂質土	しまりやや弱い、黄褐色砂を多量、暗褐色粘土粒を少額含む(SD01)。
9	黒褐色	(10YR2/2) 砂質粘土	

第17図 4トレンチ

日本大震災の津波により堆積した褐色砂が確認されている。浜堤列形成砂である3層上位には暗褐色砂質土が含まれ、漸移層の可能性があることから、褐色砂が均質となる海拔0.6m付近の面まで掘り下げて遺構精査を行ったが、遺構・遺物は確認されていない。

4 トレンチ（第17図）

4トレンチは、現地表面の海拔0.9mの地点に東西10.2m、南北2.2mの規模で設定した。約18cm程度の厚みを持つ暗褐色砂質土（1層）、灰黄褐色砂（2層）、旧水田耕作土の可能性がある下位に酸化鉄を含む暗褐色砂質粘土、および全体に酸化鉄を含むにぶい赤褐色砂質土（3・4層）、黒褐色砂質土（5層）などの表土を除去した下位で、第III浜堤列形成砂である灰黄褐色砂が検出されている。また1層最上位では東日本大震災の津波により堆積した褐色砂が確認されている。海拔0.3m付近で検出した浜堤列形成砂である6層上面で遺構精査を行い、トレンチ西側でSD01、SD02溝跡を検出しているが、遺物は確認されていない。SD01は上幅124cm、下幅64cm、5層からの深さ42cmを測り、断面形状はゆるやかなU字状を呈し、主軸方向はN-20°-Eとなる。SD02は上幅58cm、下幅34cm、5層からの深さ16cmを測り、断面形状はゆるやかなU字状を呈し、主軸方向はN-20°-Eとなる。それぞれ年代等を示す遺物は検出されず、性格、時期は不明であるが、両者共に掘り込みが5層上面で確認できること、平行した位置関係にあることから同時期に機能していた可能性が考えられる。

5 トレンチ（第18図）

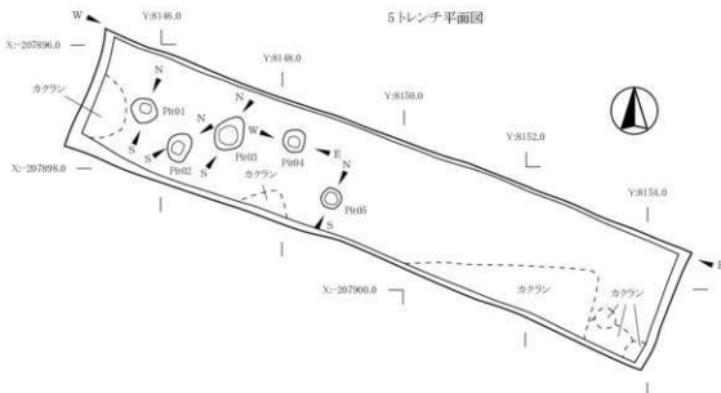
5トレンチは、現地表面の海拔1.3mの地点に東西10.3m、南北2.1mの規模で設定した。約25cm程度の厚みを持つ暗褐色砂質土（1層）、約45cm程度の厚みを持つ黒褐色砂質土（2・3層）などの表土を除去した下位で、第III浜堤列形成砂である褐色砂が検出されている。また1層最上位では東日本大震災の津波により堆積した褐色砂が確認されている。浜堤列形成砂である4層上位には黒褐色砂質土が含まれ、漸移層の可能性があることから、褐色砂が均質となる海拔0.5m付近の面まで掘り下げて遺構精査を行い、小穴（ピット）5口を検出しているが、遺物は確認されていない。小穴は円形状を呈し、覆土の状況により2種類に分類されるが、それぞれ検出面から深さ6～18cmと残存状況が悪く、柱痕跡、および年代等を示す遺物が検出されず、性格や時期は不明である。



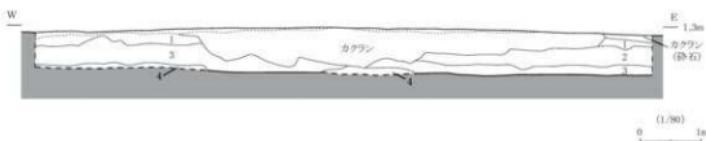
写真18 5トレンチ（西から）



写真19 5トレンチ P01（東から）



5トレンチ北壁東西セクション



5トレンチ土層注記

番号	土色	土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3) 砂質土	黄褐色砂を多量含む。最上位には2~6cm程度の褐灰色砂(微粒砂)が準確(3.11堆植物)。
2	黒褐色	(10YR3/2) 砂質土	暗褐色砂を少量、炭化物を微量含む。
3	黒褐色	(10YR2/2) 砂質土	褐色砂をブロック状にやや多く含む。
4	褐色	(10YR4/4) 砂層	中粗砂土塊、出現形成砂。

5Tr Ph01 南北セクション

S ————— N 0.8m



5Tr Ph03 南北セクション

S ————— N 0.8m



5Tr Ph05 南北セクション

S ————— N 0.8m



5Tr Ph02 南北セクション

S ————— N 0.8m



5Tr Ph04 東西セクション

W ————— E 0.8m



0 (1/40) 1m

5トレンチ内遺構土層注記

番号	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2) 砂質土	しまりやや強い。炭化物を微量、褐色砂を少量化。
2	暗褐色	(10YR3/3) 砂質土	しまり弱い。褐色砂をやや多く含む。

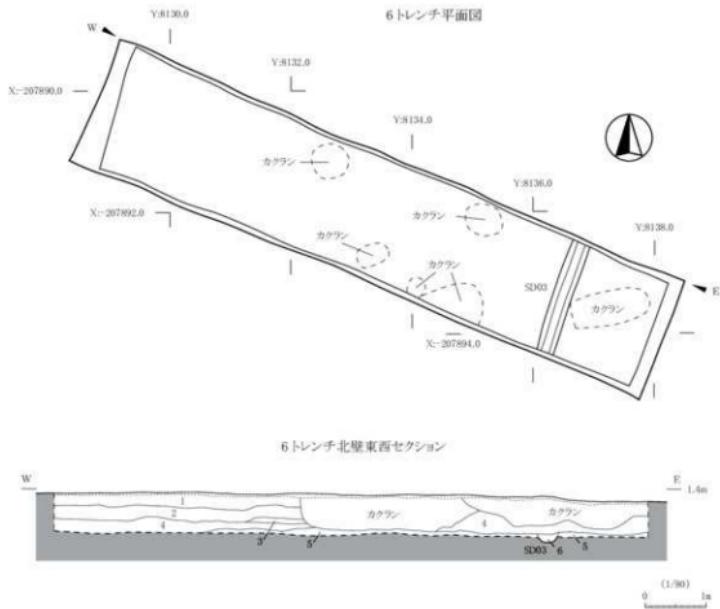
第18図 5トレンチ



写真 20 6トレンチ（東から）



写真 21 SD03（南から）



6トレンチ土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2) 砂質土	臼表土。灰黒褐色粘土アプロック。暗褐色中粒砂を多量含む。最上位には3~6cm程度の黒灰色砂(微粒砂)が堆積。(3.11堆積物)。
2	褐色	(10YR4/0) 砂層	細粒砂主体。コンクリート塊混入。大規模な複数の可能性あり。
3	黒褐色	(10YR3/2) 砂質土	暗褐色粘土を帶状に含む。大規模な複数の可能性あり。
4	黒褐色	(10YR2/2) 砂質土	褐色砂を少量。炭化物を微量含む。
5	褐色	(10YR4/0) 砂層	中粒~細粒砂主体。水磨した砂利を微量含む。浜堤形成砂。
6	黒褐色	(10YR2/2) 砂質土	褐色砂を少量含む(SD03)。

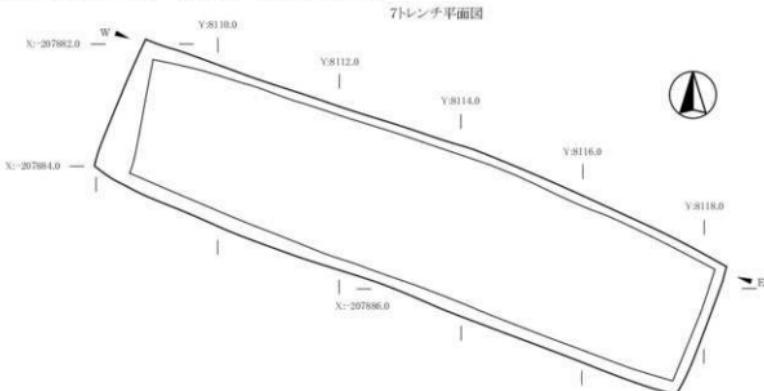
第19図 6トレンチ

6 トレンチ（第19図）

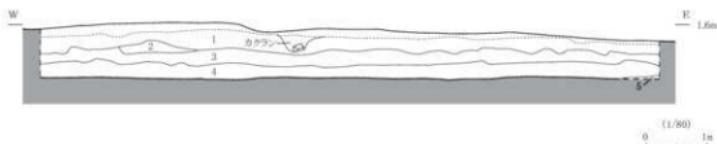
6 トレンチは、現地表面の海拔1.3mの地点にて東西10.2m、南北2.1mの規模で設定した。約25cm程度の厚みを持つ黒褐色砂質土（1層）、褐色砂（2層）、黒褐色砂質土（3・4層）などの表土を除去した下位で、第Ⅲ浜堤列形成砂である褐色砂が検出されている。また1層最上位では東日本大震災の津波により堆積した褐色砂が確認されている。浜堤列形成砂である5層上位には黒褐色砂質土が含まれ、漸移層の可能性があるこ



写真22 7トレンチ（西から）



7トレンチ北壁東西セクション



7トレンチ土層注記

番号	土色	土質	備考
1	褐色	(10Y4/4)	砂層 細粒砂主。暗褐色粘土、人頭大的雜混入。宅地造成土の可能性あり。最上位には3~20cm程度の褐色砂層（微粒砂）が堆積（3.1堆積物）。
2	黒褐色	(10Y3/2)	砂質土 暗褐色粘土ブロックをやや多く含む。
3	暗褐色	(10Y3/3)	中粒~粗粒砂主体。黒褐色粘土をやや多く含む。宅地造成土の可能性あり。
4	黒褐色	(10W2/2)	黄褐色砂を少量、炭化物を微量含む。
5	褐色	(10Y4/4)	中粒~細粒砂主体。浜堤形成砂。

第20図 7トレンチ

とから、褐色砂が均質となる海拔 0.7 m 付近の面まで掘り下げて遺構精査を行い、トレンチ東側で SD03 構跡を検出しているが、遺物は確認されていない。SD03 は上幅 32cm、下幅 12cm、5 層からの深さ 12cm を測り、断面形状はゆるやかな U 字状を呈し、主軸方向は N-20° -E となる。年代等を示す遺物は検出されず、性格や時期は不明である。

7 トレンチ（第 20 図）

7 トレンチは、現地表面の海拔 1.6 m の地点に東西 10.2 m、南北 2.3 m の規模で設定した。約 44cm 程度の厚みを持つ褐色砂（1 層）、黒褐色砂質土（2・4 層）、暗褐色砂（3 層）などの表土を除去した下位で、第Ⅲ浜堤列形成砂である褐色砂が検出されている。また 1 層最上位では東日本大震災の津波により堆積した褐灰色砂が確認されている。海拔 0.7 m 付近で検出した浜堤列形成砂である 5 層上面で遺構精査を行ったが、遺構・遺物は確認されていない。

8 トレンチ（第 21 図）

8 トレンチは、現地表面の海拔 1.4 m の地点に東西 10.0 m、南北 2.2 m の規模で設定した。約 50cm 程度の厚みを持ち、部分的ではあるが最上位で東日本大震災の津波により堆積した褐灰色砂が確認される攪乱、暗褐色砂（1 層）などの表土を除去した下位で、第Ⅲ浜堤列形成砂である褐色砂が検出されている。浜堤列形成砂である 4 层上位、および 4' 層中には酸化鉄が含まれ、漸移層の可能性があることから、褐色砂が均質となる海拔 0.4 m 付近の面まで掘り下げて遺構精査を行い、SK01 土坑を検出しているが、遺物は確認されていない。SK01 から年代等を示す遺物は検出されず、性格、時期は不明であるが、覆土の堆積状況が 13、および 14 トレンチで確認されている耕作痕の堆積状況と類似していることから、同時期の耕作に関係する土坑の可能性もある。また 5 層に関しても、トレンチ壁面で確認できる堆積状況から耕作痕の可能性がある。



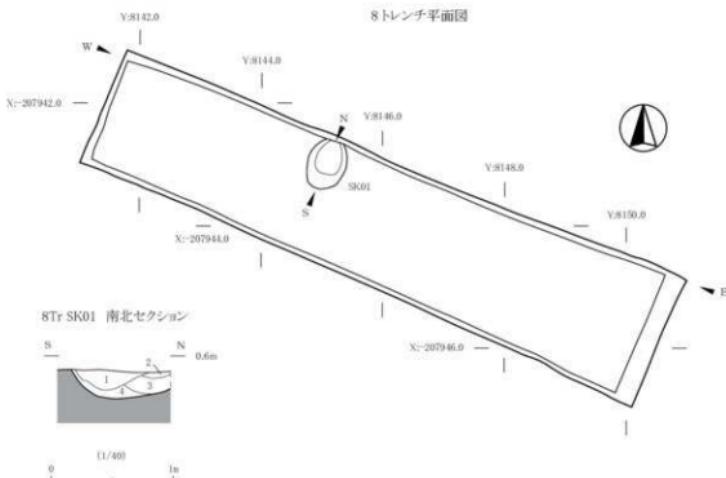
写真 23 8 トレンチ（西から）



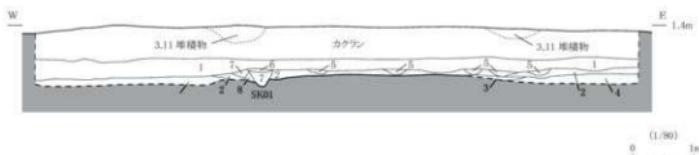
写真 24 8 トレンチ SK01（東から）

9 トレンチ（第 22 図）

9 トレンチは、現地表面の海拔 1.6 m の地点に東西 10.1 m、南北 2.2 m の規模で設定した。約 60cm 程度の厚みを持ち、部分的ではあるが最上位で東日本大震災の津波により堆積した褐灰色砂が確認される攪乱、にぶい黄褐色砂質シルト（1 層）、暗褐色砂質土（2・3 層）、灰色微粒砂を含む褐色砂（4 層）などの表土を除去した下位で、第Ⅲ浜堤列形成砂である褐色砂が検出されている。海拔 0.6 m 付近で検出した浜堤列形成砂上面で遺構精査を行ったが、遺構・遺物は確認されていない。



8 ブレンチ北壁東西セクション



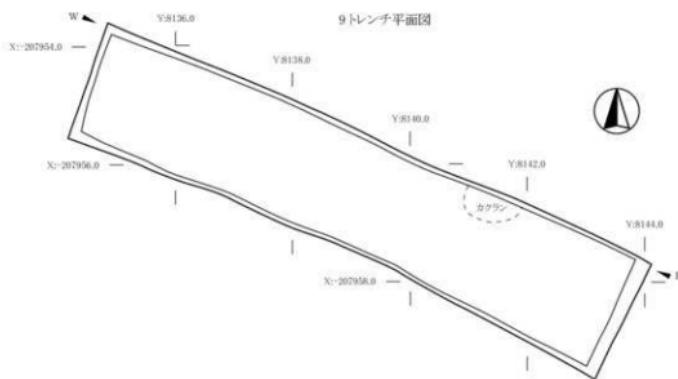
8 ブレンチ土層注記

層番	土色	土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/7)	酸化鉄をやや多く、黒褐色粘土、砂利を少量、炭化物を微量含む。
2	暗褐色	(10YR3/7)	黒褐色粘土を土中にやや多く含む。
3	灰・黄褐色	(10YR4/7)	酸化鉄を帶状に含積する。黒褐色砂を少量含む。
4	褐色	(10YR4/4)	細粒～粗粒砂で構成。上位に酸化鉄を多く含む。浜堤形成砂。
4'	褐色	(10YR4/1)	4層と比較すると砂がやや細め、酸化鉄を全体に混入。砂利を少量含む。浜堤形成砂。
5	暗褐色	(10YR3/7)	浜面付近に黒褐色粘質土を多量含む。上位には褐色砂がみられる。褐色粘土ブロックを微量含む。耕作の可能性あり。
6	褐色	(10YR1/4)	細粒砂土体。黒褐色粘土粒を微量含む (SK01)。
7	黒褐色	(10YR2/2)	褐色砂を多量含む (SK01)。
8	褐色	(10YR4/4)	黒褐色砂質土を粒状に少量含む (SK01)。

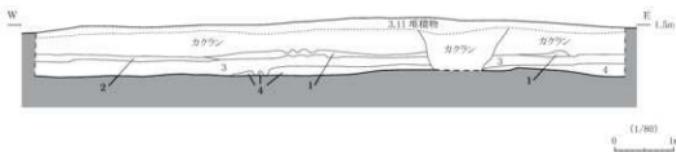
8 ブレンチ内遺構土層注記

層番	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	褐色砂を少量、酸化鉄を多量含む。
2	褐色	(10YR4/4)	細粒砂主体。黒褐色粘土粒を微量含む。
3	黒褐色	(10YR2/2)	褐色砂を多量含む。
4	褐色	(10YR4/4)	黒褐色砂質土を粒状に少量含む。

第21図 8 ブレンチ



9トレンチ北壁東西セクション



9トレンチ土層注記

層番	土色	土質	備考
1	にじい黄褐色	(10YR4/3) 砂質シルト	細粒砂主体。黒灰色粘土粒をやや多く。炭化物を微量含む。
2	暗褐色	(10YR3/7) 砂質土	細粒砂主体。黒褐色粘土粒を多量含む。
3	暗褐色	(10YR3/2) 砂質土	黒褐色粘土粒をやや多く。黒褐色粘土粒を少量化。
4	褐色	(10YR4/4) 砂層	細粒砂主体。上位には灰色の粗粒砂を厚さ3~5cm程度堆積。

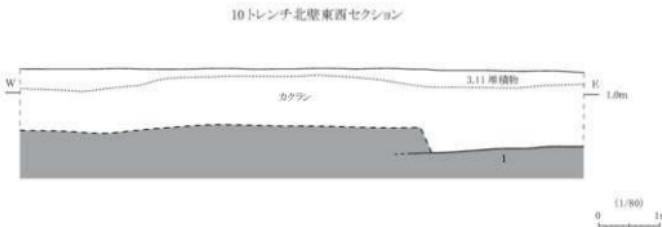
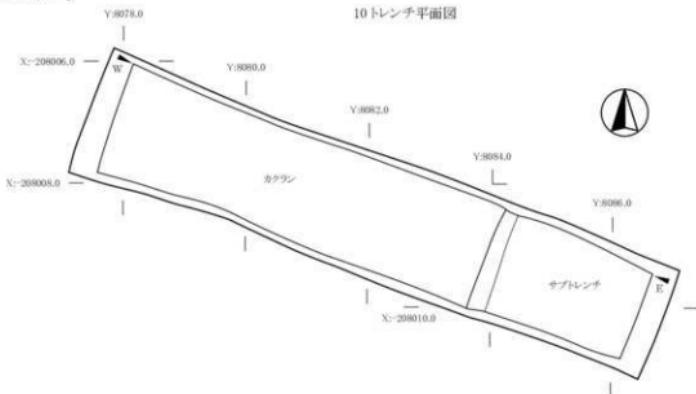
第22図 9トレンチ

10トレンチ（第23図）

10トレンチは、現地表面の海拔1.4mの地点に東西9.9m、南北2.2mの規模で設定した。重機により現地表面より約1m程度掘り下げたが、トレンチ内は全面搅乱されていたため、トレンチ東部に東西3.0m、南北1.6mの規模でサブトレンチを設定し、さらに40cm程度掘下げた海拔0.1m付近で第III浜堤列形成砂である褐色砂が検出されている。遺構・遺物は確認されていない。



写真27 10トレンチ（東から）



10トレンチ土層注記

層%	土色	土質	備考
1	褐色	(10TA4/4)	砂層 細粒砂土体、浜堤形成砂。

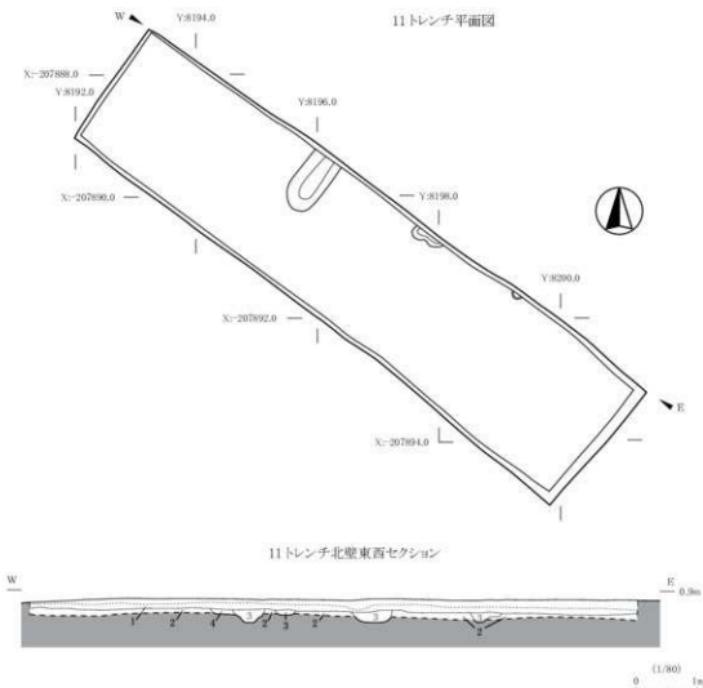
第23図 10トレンチ

11 トレンチ（第24図）

11 トレンチは、現地表面の海拔 0.8 m の地点に東西 10.1 m、南北 2.4 m の規模で設定した。約 14 cm 程度の厚みを持つ暗褐色砂質土（1 層）などの表土を除去した下位で、第III 浜堤列形成砂である褐色砂が検出されている。また 1 層最上位では東日本大震災の津波により堆積した褐色砂が確認されている。浜堤列形成砂である 2 層上位には暗褐色粘質土が含まれ、漸移層の可能性がある。



写真 28 11 トレンチ（西から）



11 トレンチ土層注記

層番	土色	土質	備考
1	暗褐色	(10TR3/3)	砂質土 しまり強い。植物遺体を少量含む。最上位には厚さ 2~16 cm 程度の褐色砂（微粒砂）が堆積。 (3, 11 層埋物)。
2	褐色	(10TR4/4)	砂層 しまりやや強い。暗褐色砂質土をブロック状にやや多く含む。浜堤列形成砂。
3	暗褐色	(10TR3/4)	砂質土 しまりやや弱い。2 層及び暗褐色粘質土をブロック状に少量、酸化鉄を少量含む。耕作痕の可能性あり。
4	褐色	(10TR4/6)	砂質土 しまりやや弱い。2 層をブロック状に多く、酸化鉄を微量含む。

第24図 11 トレンチ

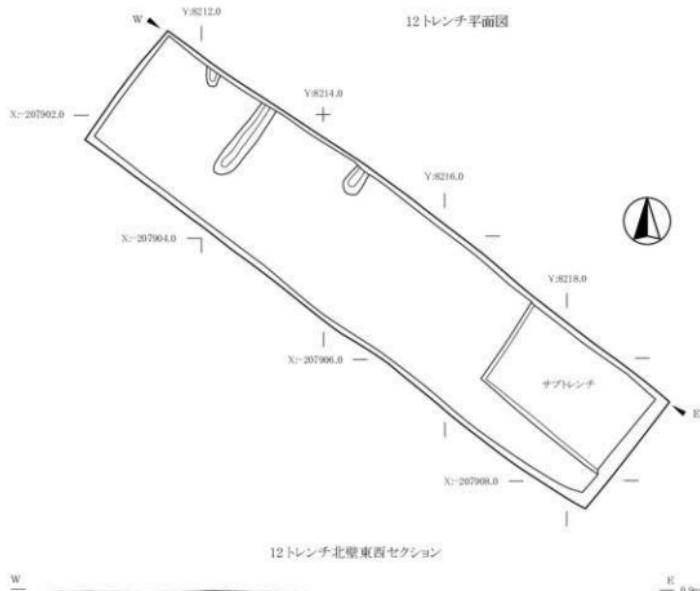
ことから、褐色砂が均質となる海拔 0.5 m 付近の面まで掘り下げる遺構精査を行い、溝状遺構を検出しているが、遺物は確認されていない。溝状遺構の覆土堆積状況は 13、および 14 トレンチで確認されている耕作痕の堆積状況と一致していることから、同時期の耕作痕の可能性がある。

12 トレンチ（第 25 図）

12 トレンチは、現地表面の海拔 0.9 m の地点に東西 10.2 m、南北 2.2 m の規模で設定した。



写真 29 12 トレンチ（西から）



12 トレンチ土層注記

層 No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	(10YR5/2)	砂質土 しまり強い。植物遺体を少額含む。最上位には厚さ2~16cm程度の褐灰色砂（褐紅砂）が堆積。(3,11層遺物)
2	褐色	(10YR4/0)	砂層 しまりやや強い。暗褐色砂質土をブロック状に少量含む。直壁成砂。
3	灰褐色	(10YR6/2)	黒褐色砂質土（砂粒含む）と互層を形成。下位に酸化鉄を小ブロック状に含む。
4	暗褐色	(10YR3/0)	しまりやや弱い。2層をブロック状に少量、暗褐色砂質土をブロック状にやや多く。酸化鉄を少量含む。耕作痕の可能性あり。
5	褐色	(10YR4/0)	しまりやや弱い。2層をブロック状に多く。酸化鉄を微量含む。

第 25 図 12 トレンチ

約20cm程度の厚みを持つ暗褐色砂質土（1層）などの表土を除去した下位で、第III浜堤列形成砂である褐色砂が検出されている。また1層最上位では東日本大震災の津波により堆積した褐灰色砂が確認されている。浜堤列形成砂である2層上位には暗褐色粘質土が含まれ、漸移層の可能性があることから、褐色砂が均質となる海拔0.6m付近の面まで掘り下げて遺構精査を行い、溝状遺構を検出しているが、遺物は確認されていない。溝状遺構の覆土堆積状況は13、および14トレンチで確認されている耕作痕の堆積状況と一致していることから、同時期の耕作痕の可能性がある。

13トレンチ（第26図）

13トレンチは、現地表面の海拔1.3mの地点に東西9.8m、南北2.3mの規模で設定した。約28cm程度の厚みを持つ黒褐色砂質土（1層）、にぶい黄褐色砂質土（2層）などの表土を除去した



写真30 13トレンチ（西から）



写真33 14トレンチ（西から）



写真31 13トレンチ P01（南から）



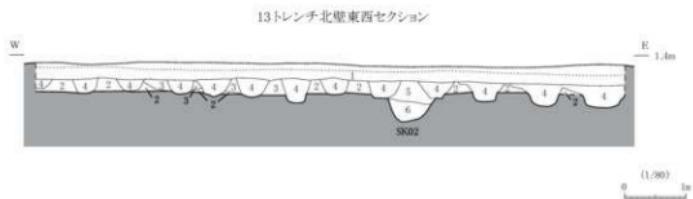
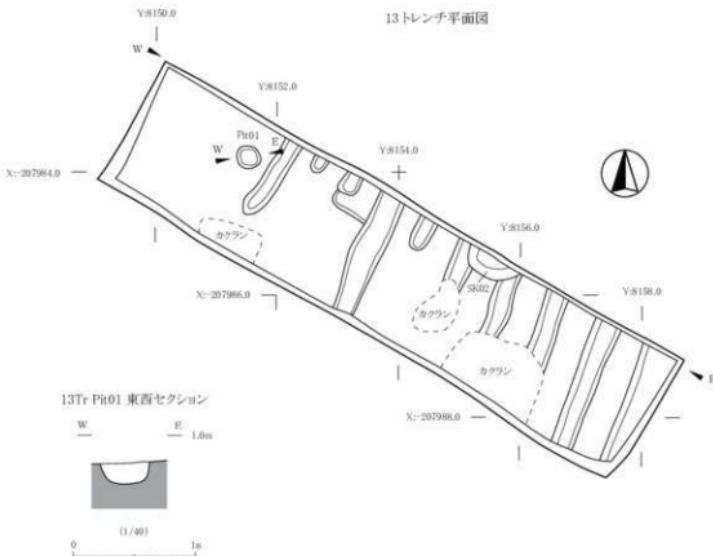
写真34 14トレンチ P01（東から）



写真32 13トレンチ SK02 及び耕作痕（南から）



写真35 14トレンチ耕作痕（南から）



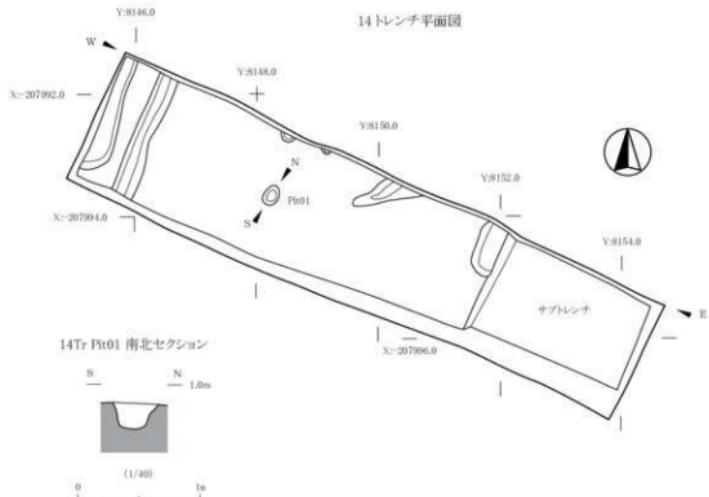
13 トレンチ土層注記

番号	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10R3/2)	炭化物微細含む。ビニール片散見。旧表土（耕作土）。最上位には厚さ4~16cm程度の褐色砂（微粒砂）が堆積（3.11堆積物）。
2	にじみ、黄褐色	(10R4/3)	褐色砂質土を多量含む。下位には微粒~細粒の褐色砂（土壤風成砂）が多く混入。
3	暗褐色	(10R3/3)	しまりやぐれび。部分的に褐色砂質土を厚さ3cm程度の帯状に含む。
4	黒褐色	(10W2/3)	耕作層。下位及び中位に黒褐色粘質土を帶状に含む。一部にはビニール片が混入。
5	暗褐色	(10R3/3)	褐色砂、暗褐色砂質土の混合層（SK02）。
6	褐色	(10W4/4)	土壤風成砂が主体だが、暗褐色砂質土をブロック状に少量含む（SK02）。

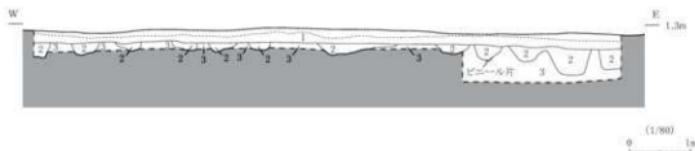
13 トレンチ内遺構土層注記

番号	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10R2/3)	黒褐色粘土ブロックをやや多く、褐色砂を少量含む。

第26図 13 トレンチ



14トレンチ北壁東西セクション



14トレンチ土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	砂質土 炭化物微量含む。ビニール片散見。旧表土（耕作土）。最上位には厚さ4~36cm程度の褐灰色砂（粗粒砂）が堆積（3.1堆積）。
2	黒褐色	(10YR2/3)	耕作土。下位及び中位に黒褐色粘質土を帶状に含む。一部にはビニール片が混入。
3	褐色	(10YR4/4)	粗粒~細粒砂で形成。浜堤形砂。

14トレンチ内遺構土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/3)	しまりやや弱い。褐色細粒砂、暗褐色粘土をブロック状に多く含む。

第27図 14トレンチ

下位で、第III浜堤列形成砂である褐色砂が検出されている。また1層最上位では東日本大震災の津波により堆積した褐灰色砂が確認されている。海拔0.8m付近で検出した浜堤列形成砂上面で遺構精査を行い、SK02土坑、小穴（ピット）1口、平面で10条の溝状遺構を検出しているが、遺物は確認されていない。SK02からは年代等を示す遺物は検出されず、性格や時期は不明であるが、溝状遺構に切られていることから近代以前にさかのぼることも考えられる。小穴からは柱痕跡および年代等を示す遺物は検出されず、性格や時期は不明である。溝状遺構はそれぞれ上幅44cm程度、

下幅 24cm 程度を測り、断面形状はゆるやかな U 字状を呈し、覆土の堆積状況に関して下位、および中位に黒褐色粘質土を帶状に含む特徴がある。主軸方向は N=21° -E に等間隔に平行して配置されており、基底面にビニール片が散見されることから近代以降の耕作痕と考えられる。

14 トレンチ（第 27 図）

14 トレンチは、現地表面の海拔 1.2 m の地点に東西 9.8 m、南北 2.3 m の規模で設定した。約 24cm 程度の厚みを持つ黒褐色砂質土（1 層）などの表土を除去した下位で、第Ⅲ浜堤列形成砂である褐色砂が検出されている。また 1 層最上位では東日本大震災の津波により堆積した褐色砂が確認されている。浜堤列形成砂である 2 層上位には黒褐色砂質土が含まれ、漸移層の可能性があることから、褐色砂が均質となる海拔 0.9 m 付近の面まで掘り下げて遺構精査を行い、小穴（ピット）1 口、溝状遺構を検出しているが、遺物は確認されていない。小穴からは柱痕跡および年代等を示す遺物は検出されず性格や時期は不明であるが、覆土の堆積状況が 13 トレンチで確認されている耕作痕の堆積状況と類似していることから、同時期の耕作に関係する小穴の可能性もある。溝状遺構は 13 トレンチで確認されている耕作痕と形状、配置、覆土堆積状況が一致していることから、同時期の耕作痕と考えられる。

4. まとめ

今回の調査では、溝跡 3 条、土坑 2 基、小穴（ピット）7 口および溝状遺構の存在が認められた。一方遺物に関しては、遺構および浜堤列形成砂に共伴する遺物は発見されなかった。溝状遺構に関しては、それぞれ形状、配置、覆土堆積状況が類似または一致していること、基底面でビニール片が確認されていることから近代以降の耕作痕と考えられる。検出された溝跡、土坑、小穴（ピット）に関してはそれぞれ性格や時期は不明であるが、一部では覆土堆積状況土が上記耕作痕との類似性が認められることから同時期に属する可能性も考えられる。また、南側に隣接する高大瀬遺跡では古代、近世の遺物が出土していることから同時期に属する可能性も考えられるが、同遺跡で検出された 10 世紀前半の降灰と考えられる灰白色火山灰が今回の調査では検出されていないことから古代にさかのぼる可能性は低い。第Ⅲ浜堤列に関しては、浜堤列形成砂上面が搅乱により削平されている 10 トレンチを除くと、各トレンチで検出された浜堤列形成砂上面の海拔は 0.3 ~ 0.9 m となり、緩やかではあるが南から北へ傾斜する傾向がみられる。

【引用・参考文献】

岩沼市史編纂室 2015 「高大瀬遺跡」『岩沼市史 4 資料編 I 考古』

川又隆央 2015 「事例報告 2 岩沼市高大瀬遺跡」『宮城考古学』第 17 号 宮城県考古学会

報 告 書 抄 錄

岩沼市文化財調査報告書第15集
東日本大震災復興関連埋蔵文化財調査報告書IV

－貞山堀・高大瀬遺跡隣接地－

平成28年3月

発行 岩沼市教育委員会

岩沼市桜1丁目6番20号

生涯学習課 TEL0223(23)1111 内線573

印刷 株式会社 国井印刷

岩沼市藤浪1丁目4-35

TEL0223(22)2221